

古いものと見るか、伊勢齋宮の段を巻頭に有する小式部内侍本の成立を一層古いものと考へるかの差異から導かれるのである。これ等二つの説は、最も注意すべきものと認められるが、しからば我々は、その何れを是とし何れを非となすべきであるか、或は又兩者共に誤れりとして斥くべきであるか。この判断の上に本章の結論が見出されるであらう。

管見を以てすれば、在五物語在五中將日記と稱せられる本は、その體裁に於て可成整然たる組織を有してゐたと考へられる。殊に日記なるものは、日次記であり、従つてその内容は日次順、年代順に配列されてゐるべき筈である。無論勢語の如き歌物語に於て、各章段に年代順的配列を與へることは、極めて困難であるにしても、冒頭に初冠の段を置き、最後に終焉の段を配せる朱雀院本系統の諸本こそ、在五物語、又は五中將日記等の名稱を冠せしむるに適はしきものでなければならぬ。これに對して伊勢物語なる名稱は、朱雀院本に對立せる小式部内侍本の系統、即ち伊勢齋宮の條を巻頭第一に置いた本に命名された名稱であると解釋するを以て、最も至當とせざるを得ない。ここに於て、最も重要な問題とされるのは、朱雀院本

欠

欠

第二節 歌物語の發生

第一項 草假名と假名文

平安朝時代の物語文は、草假名の完成をその主なる外面的動機として發生したやうに思はれる。草假名は遠く記紀の歌や、佛足石歌や、字音の正音をもつて表はされた萬葉集の歌の一部や、正倉院文書續修別修中の一部や、神樂、催馬樂や、祝詞及び宣命の本文中の天爾波や、降つて和讃等に用ゐられてゐるやうな漢字の一音一字式の表現形式が一般に流行し、その用法が漸次確立すると同時に、他方書道の名手が出て、一世を指導し、漢字の草體に熟練して、つひに決定的な型を作り出した結果であらうと考へられる。

思ふに奈良及び平安時代の知識階級は、思想を文字によつて表現するのに、純粹

な正しい漢文を用ゐる者もあり、和喚ある變體的な準漢文を用ゐる者もあつたであらう。一體漢文的な文章は、意味を解釋する際、字句の位置配列を目に見てその意義をとる場合と、訓み方を目に見、又は耳に聞いてその意義をとる場合と二の形式がある。古語拾遺や日本靈異記等は漢文的な表現であつても、その訓讀によつては、和文的なものに見、かつ聞くことが出来る。それ故に、準漢文は漢文としては破格であつても、訓讀の仕方によつて國文の文脈を保ち得るのみならず、かへつて實用上便利であるといふ向きもあり得る。訓讀法は漢文的なものを、國文的なものに改めようとする努力の所産であると思はれる。

かく實際上の要求から、音訓を交へつつ一方には字句の位置によりて諸格を示すが如き、漢文ともつかず、和文ともつかない古事記或は萬葉集十六以下に見える詞書の如き文章があらはれ、次いで、漢文的形式を全然もたず、天爾波を加添して諸格を表す祝詞宣命のやうな文章に進み、更にかつて韻文に於て試みられたる如く、散文にも全然訓を斥け、主として音による表現形式、即ち假名文の原形と思はれる文章が生れ出たものと考へてさして不都合ではなからうと思はれる。かく表現

形式の變遷する理由は、訓によるよりも音による方が、多少の繁雜さを有するにしても、國語を表現するに適切であり、確實であつたからであらう。即ち一音一字の表現形式は、日常の言語をそのまま直接的に文字なる符號によつて完全にうつすことが出来、從來の漢文、準漢文に比して一層正確であり、音訓並用文に比して更に本格的であつたと思はれる。かくて、この形式は、先づ和歌に試みられ、更に散文にもその應用の範圍を擴大して行つたものと考へられる。

原始的な草假名が散文の表現形式として應用せられて行く理由は、勿論上述の如き表現上の適確といふことが主であらうが、他にも一二の理由が存する。即ち漢文學が衰頹して、和歌が盛になつたことが一つの理由となりはしないであらうか。漢文學は、天曆以後次第に衰へ、四道専門の家が固定し、學問に生氣を缺くやうになり、和歌が漢詩に代つて隆盛に向ひ、和歌に準すべき文學が、漢文學の外に望まれるやうになつたのが、その當時の趨勢である。次に、女性又は女性的文化の支持といふことも、一つの理由となり得る。漢字と假名とが對立して、漢字は男文字とされ、假名は女文字とされて、兩者の使用に限界が生ずるやうになり、貫之は特に女

性に假託して土佐日記を書き、紫式部は眞字を書きちらす清少納言の女性らしからざる態度を非難した。漢文と假名文との關係は卷子本と草子との關係の如くに、一は公的生活に關するものであり、他は私的生活に關するものであり、前者は嚴格な學術的なものであり、後者はうちくつろいだ藝術的なものである。一體支那風のもものが男性的のものとなされ、日本風のもものが女性的なものとなされたことは、平安朝時代の一般の風習であつたらしい。男女兩性の區別は、生活のあらゆる分野に劃然と決定され、草假名は漢字に對して、和歌は漢詩に對して、物語は漢文學に對して、各々女性的なものであり、從つて女性又は女性的文化の支持を受くべきものである。それ故に支那風の學問藝術は、男性によつて支持せらるべきは當然であつて、博士のうちつづき女子うませたるをすさまじきものとなし、娘に對してをのこにてもたらぬこそさいはひなかりけれと父が嘆いたのは當然のことである。當時の女性が支那風の學問藝術に對して、殆ど窓を閉ぢられてゐたらしいことは想像に難くない。紫式部は、他の女房達より「おまへはかくおはすれば御幸は少きなり。なでふ女が眞字書はよむ。昔は經よむをだに人は制しき」といはれ、中宮彰

子さへも、人目を忍んでびそかに樂府二卷を學ばれた位である。經國集中に作詩の見える嵯峨天皇の皇女智子内親王の如きは、漢文學全盛なりし前時代の人なればこそであり、むしろ當時としては稀有のことに屬する。宣耀殿の女御が「一には御手を習ひ給へ。次にはきんの御琴を人よりことに弾きまさらむとおぼせ。さては古今の歌二十卷をみなうかべさせ給ふを、御學問にはせさせ給へ」といふ如き教育を受けたのが、當時の實際の状態であつたと思はれる。尤も當時日本國見在書目録に見える漢土の書籍の中、白氏文集、文選史記等の書が碩學によつてもめられた願文、表申文等と共に、後宮女性に愛讀されたことは、枕草子その他によつて確證されるが、それは一般教養又は鑑賞としてであり、學術的研究としてはなかつたと思はれる。

草假名は、男性的な文字に對して女性的な文字である。物語に用ゐられた文字も、その草假名によつて表現せらるるが故に女性的な文字であり、かつ表現せらるる内容も、漢土の事實にあらで、日常生活の事實である點に於て女性的な事實であり、かつ又物語の語らるる言葉が口語的であるらしき點に於て女性的な文章である。

かくして草假名が女性及び女性的文化の支持と一般社會の實際上の要求とをあはせつつ、和歌より詞書へ、詞書より消息文へ、更に日記・紀行物語へと應用範圍を擴大して行つたことが想像される。要するに、草假名又は假名文は、實際上の要求と女性的文化の支持とをもつて發生展開したものと解釋したいのである。

第二項 物語文の發生

物語の發生については、二つの方面からの考察が可能である。その一は形式的な方面であり、他は内容的な方面である。

先づ形式的方面に關して云へば、和歌の詞書が、草假名による散文的表現即ち物語の原形となつたのではないかと思はれる。詞書と稱するものは和歌が如何なる場合に讀まれたかといふことの説明である。已に和歌が一音一字式の表現方法に成功した以上、詞書が依然萬葉集のそのやうに漢文を以て記載されては、内容上に於ても、形式上に於ても不釣合でもあり、且不充分である。従つて是非和歌と同様、一音一字式を以て表現する必要がある。しかも詞書それ自體はさして長

いものではないので、原始的な草假名がこれに適用されることは、さして困難であるとは思惟されない。一方消息文は別に往來物式の一類特別な準漢文體の文章が成立し、男子の間に用ゐられたのであるが、難澁繁雜で、かつ不便を免れないために、別に純粹談話語の直接的表現に近き草假名の文章も使用され、この方が勢力を得易かつたと想像される。又當時に於ては漢文又は準漢文は書き得ずとも假名文は書き得るといふ人も存し、次第に假名文が流行するに至つたものと思はれる。殊に消息文にあつては、當時の社會生活の習慣より推して、和歌が多く用ゐられ、消息文はその詞書の一部を兼ねる如き有様であつたと想像される。従つて右二者が先づ假名文を以て表現されたと考へることは、あながち不當ではない。

さて詞書が假名文として表現せられ、やがて物語として推移して行く姿は、これを歌物語に於て認めることが出来る。和歌を中心として、詞書を前後に擴大し、これにやや詳密な敘述的形式を附與すると、直ちに物語の原始的様式たる小話を形成する。かかる小話が即ち歌物語であり、これが平安朝時代の物語の源流の一である。

歌物語なる名稱は、古くより行はれた名稱であるが、從來の見解は、歌を主にしたる物語といふ意味に於てであつて、かく動的に又發生的には考へられてゐなかつたやうである。しかし歌物語を歌と物語との二つをつなぐ橋梁として解釋する時、歌物語とはいみじくも附せられた名稱である。源氏物語五十四帖の成立する遠き以前の源流が、この和歌的小話にあることを思へば、歌物語の發生又は存在はきはめて意義深きものである。

平安朝時代に於て、最も古い歌物語として原始の形の想像され易いのは伊勢物語である。しかし伊勢物語と雖も、現存諸本は何れも原始の形と思惟されず、後人によつて更に修補された第二次のものと思はれる。異本研究によつて得た結論に従へば、第一次伊勢物語に於ては、物語的部分が第二次のそれより少かつたらしい。即ち詞書的要素がより濃厚であつたらうと言はれるのである。伊勢物語の小話是一段々必ず歌を有し、その小話の範圍が古く遡れば遡るだけ狭められ、註釋的敘述的部分が縮少されて行き、小話の數も亦減少し、物語形式が漸く稀薄となつて行くことを看取し得るのである。即ち伊勢物語の源流はこれを歌集たる業

欠

欠

千早振神の忌垣も越ぬべし今は我身の惜からなくに(古今和歌六帖第二)

めにはみてゝにはとられぬ月のうちのかつらのこときゝみにそありける(天

福本第七十三段)

目二破見而手二破不所取月内之楓如妹乎奈何責(萬葉集卷四)

目にはみて手には取られぬ月の内の桂の如き妹にも有かな(古今和歌六帖第

六)

いはねふみかさなる山にあらねともあはぬ日おほくこひわたる哉(天福本第

七十四段)

石根踏重成山雖不有不相日數戀度鴨(萬葉集卷十一)

岩ねふみかさなる山はなけれどもあはぬ日かずを戀や渡らむ(拾遺集卷十五)

いはねふみかさなる山にあらねども逢ぬ日數を戀わたる哉(柿本集)

浪まよりみゆるこしまのはまひさしひさしくなりぬきみにあひみて(天福本

第一百十六段)

浪間従所見小島之濱久木久成奴君爾不相四手(萬葉集卷十一)

浪間よりみゆる小島の濱楸久しくなりぬきみにあはずて(拾遺集卷十四)
波間よりみゆる小島の濱楸久しくなりぬ妹に逢ずて(古今和歌六帖第六)

右の結果に見るに、ちはやふる「いはねふみ」浪まよりの三首に於ては、萬葉集と拾遺集の歌詞は略同一であり、伊勢物語のそれは相違する。この事實によつて三者の相互關係に二の場合が想像される。第一は萬葉集—伊勢物語、萬葉集—拾遺集といふ關係、即ち伊勢物語は萬葉集より取り、拾遺集も萬葉集より取り、勢語と拾遺集との間には何等の相關關係を見出し得ない場合、第二は萬葉集—拾遺集—伊勢物語なる關係、即ち伊勢物語が拾遺集を媒介として萬葉集に關係する場合である。而して萬葉集と伊勢物語とを連係せしめる十首の中、拾遺集に存する歌は僅かに右の三首に過ぎないことは、第二の場合の關係を認めることの出来ない一の證明ともされるであらう。

次に「あしべより」玉のを、「めにはみて」浪まよりに於ては、萬葉集と古今和歌六帖との歌詞は相近く、伊勢物語のそれはやや相違する。従つて拾遺集の場合と同様、萬葉集の歌に關する限りに於ては、勢語と古今和歌六帖との間には、何等の直接的

交渉を認め得ず、兩者の歌は共に萬葉集より直接導かれたものと解釋するのが至當である。かくの如く拾遺集、古今和歌六帖との直接的關係が已に否定される以上、殘餘の四首も萬葉集より何等の媒介なしに採録されたものであることに、論證の餘地はないであらう。而してかかる見解は、次の勢語異本と萬葉集との關係に於ても、同様に肯定され、支持されることである。

前にあげた萬葉集の歌以外に、勢語異本に現れて來るものは、左の五首である。しかもそれ等が、悉く神宮文庫本と小式部内侍本との二者に限られてゐることは注意されねばならない。

神風やいせのはまをきをりふせてたひねやすらむあらしはまへに(小式部内侍本)

神風之伊勢之濱荻折伏客宿也將爲荒濱邊爾(萬葉集卷四)

わかやとにまきしなてしこいつしかもはなにさかなんよそへてもみむ(小式部内侍本神宮文庫本)

吾屋外爾蒔之罌麥何時毛花爾咲奈武名蘇經乍見武(萬葉集卷八)

つきしあれはあらはんこともしらすしてねてくるわれを人やみつらん(小式部内侍本)

月之有者明覽別裳不知而寐吾來乎人見兼鴨萬葉集卷十一)

ゆふつくよあか月かたのあさかけにわか身はなりぬきみをこふとて(小式部内侍本・神宮文庫本)

暮月夜曉闇夜乃朝影爾吾身者成奴汝乎念金丹(萬葉集卷十一)

ゆふつくよあか月やみのあさかけにわか身はなりぬ戀のしけきに(猿丸大夫集)

おもひつゝをれはすへなしむはたまのよるになりなはわれこそゆかめ(神宮文庫本)

念管座者苦毛夜于玉之夜爾至者吾社湯龜萬葉集卷十二)

要するに、伊勢物語はその成立に際し、素材の一部分を萬葉集に仰いでゐる事實は、右の説明によつて大體明かにされたことと思はれる。

第二項 古今集

伊勢物語と古今集との關係については、從來種々論議されて來たが、これを要約すると(一)古今集の詞書に據つて伊勢物語が書かれたとするもの(二)伊勢物語を基として古今集の詞書が出来たとするもの(三)兩者共に伊勢物語の粉本に據つて書かれたとするものの三の場合に歸することが出来るやうである。そしてこれ等の關係が推測される根據としては、古今集の中の業平の歌が特に長い詞書を有し、しかもその文章が伊勢物語のそれと甚だ類似せる點が擧げられてゐる。

右の諸説に對して、筆者は次の如き假説を描いてゐる。即ち伊勢物語の粉本とも言ふべき業平歌集は、古今集の重要な材料の一となると共に、又伊勢物語の骨子を形成するものであつた。而して古今集は一方業平歌集に據ると同時に、他方に於て伊勢物語の成立に對し幾多の素材を提供したものであると考へられるのである。換言すれば、伊勢物語を構成する歌の中に、直接業平歌集より來るものと古今集より取入れられたものとを區別し、粉本伊勢物語即ち業平歌集と古今集と伊

勢物語とを三角形的關係に於て認めようとするのである。然らば、かかる假説は、如何なる根據に立脚するのであらうか、この事について考へて見よう。

今例として天福本を取れば、天福本の歌二百九首中、古今集に見える歌は六十二首を數へることが出来るが、これは三種に分つて考察しなければならぬ。第一は古今集の詞書と伊勢物語の文章との相類似するもの、例へば、

伊勢物語	<p>5</p> <p>むかしおとこ有けりひんかしの五條わたりにいとしのひていきけりみそかなる所なれはかとよりもえいらてわらはへのふみあけたるついひちのくつれよりかよひけりひとしけくもあらねとたひかさなりけれはあるしきよつけてそのかよひ地に夜ことに人をすへてまもらせけれはいけともえあはてかへりけりさてよめる</p> <p>ひとしれぬわかよひちのせきもりはよひ〜ことにうちもねな〜んとよめり</p>
古今集	<p>13</p> <p>ひんがしの五條わたりに人をしりおきて、まかりかよひけり。しのびなる所なりければ、かどよりしもえいらで、かきのくづれよりかよひけるを、たびかさなりければ、あるじきよつけて、かのみちに夜ごとに人をふせて、まもらすれば、いきけれど、えあはでのみかへりて、よみてやりける。</p> <p>なりひらの朝臣 人しれぬわかよひちのせきもりはよひ</p>

17	<p>年ころをとつれさりける人のさくらさかりにみにきたりけれはあるし</p> <p>あたなりとなにこそたてれ櫻花年にまねなる人もまちけり返し</p> <p>けふこそすはあすは雪とそふりなましきえすはありとも花とみましや</p>
1	<p>さくらの花のさかりに、ひさしくとはざりける人のきたりける時に讀みける。</p> <p>讀人しらず</p> <p>あだなりと名にこそたてれ櫻花としにまねなる人もまちけり</p> <p>返し</p> <p>けふこそすはあすは雪とぞふりなまし消えずば有りとも花とみましや</p> <p>藥平朝臣</p>
99	<p>むかし右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりけるくるまに女のかほのしたすたれよりほのかにみえければ中將なりけ</p>
11	<p>右近のむまばのひをりの日、むかひにたてたりけるくるまのしたすだれより、女のかほのほのかにみえければ、よ</p>

<p>るおとこのよみてやりける みすもあらずみもせぬ人のこひしくは あやなくけふやなかくめくらさん返し しるしらぬなにかあやなくわきていは んおもひのみこそしるへなりけれのちは たれとしりにけり</p>	<p>むでつかはしける。 在原なりひらの朝臣 みずもあらずみもせぬ人の戀しくばあや なくけふやながめくらさむ 返し よみ人しらず しるしらぬなにかあやなくわきていはむ おもひのみこそしるべなりけれ</p>
---	--

等二十五首に及ぶものである。而してこれらの歌は何れも業平の作、又は業平との贈答歌と認められるもののみで、その詞書が類似するのは、古今集伊勢物語共に業平歌集より採録せるためと解釋されるのである。第二は、古今集の詞書が簡單なるに對し、伊勢物語のそれが長大なるもの、例へば、

<p>41 昔女はらからふたりありけりひとりはい やしきおとこのまつしきひとりはおてな るおとこもたりけりいやしきおとこもた</p>	<p>17 めのおとうとをもて侍りける人に、う へのきぬをおくるとて、よみてやりけ る。 なりひらの朝臣 むらさきの色こき時はめもはるに野なる 草木ぞわかれざりける</p>
--	--

<p>80 昔おとろへたる家にふちの花うへたる人 ありけりやよひのつこもりにその日あめ そほふるに人のもとへおとりてたてまつら すとてよめる ぬれつゝそしるておとりつる年の内には はるはいくかもあらしとおもへは</p>	<p>るしはすのつこもりにうへのきぬをあら ひて、つからはりけり心さしはいたしけ れとさるいやしきわさもならはさりけれ はうへのきぬのかたをはりやりてけりせ む方もなくてたゝなきになきけりこれを かのあてなるおとこきよていと心くるし かりければいときよなるろさうのう へのきぬをみてゝやるとて むらさきの色こき時はめもはるに野な る草木ぞわかれざりけるむさしのゝ心な るへし</p>
<p>2 ぬれつゝぞしひてをりつる年のうちに春 はいくかもあらしとおもへば</p>	<p>やよひのつごもりの日、雨のふりける に藤の花をよりて人につかはしける。 なりひらの朝臣 むらさきの色こき時はめもはるに野なる 草木ぞわかれざりける</p>

むかしあてなるおとこありけりそのおと
 このもとなりける人を内記に有けるふち
 はらのとしゆきといふ人よはひけりされ
 とわかかれはふみもおさしからすこ
 とはもいひしらすいはむやうたはよまさ
 りければかのあるしなる人あんをかきて
 かゝせてやりけりめてまといにけりきて
 おとこのよめる
 つれ／＼のなかめにまさる涙河そての
 みひちてあふよしもなし返しれいのおと
 こ女にかはりて
 あきみこそそてはひつらめ涙河身さへ
 なかるときかはたのまむといへりければ
 おとこいといたうめてまゝてまきて
 ふはこにいれてありけりとなんいふなる
 おとこふみをこせたりえてのちの事なり
 けりあめのふりぬへきになんみわつらひ

なりひらの朝臣の家に侍りける女の
 もとに、よみてつかはしける。
 としゆきの朝臣
 つれづれのながめにまさる涙河袖のみぬ
 れてあふよしもなし
 かの女にかはりて、返しによめる。
 なりひらの朝臣
 あきみこそ袖はひづらめ涙河身さへなが
 るときかばたのまん
 ふちはらの敏行朝臣の業平朝臣の家
 なりける女をあひしりて、ふみつかは
 せりけることばに、いままうでく、あめ

侍みさいはひあらはこのあめはふらしと
 いへりければれいのおとこ女にかはりて
 よみてやらす
 かす／＼に思ひおもはずとひかたみ身
 をしる雨はふりそまさるとよみてやれ
 りければみのもかさもとありあへてしと
 にぬれてまといひきにけり

のふりけるをなむみわづらひ侍る、と
 いへりけるをきまて、かの女にかはり
 てよめりける。
 在原業平朝臣
 かす／＼におもひおもはずとひがたみ身
 をしる雨はふりぞまされる

等十二首がこれに當る。これ等の歌は何れも業平又は業平と贈答の歌と目せら
 れるもののみであるが、古今集の詞書と伊勢物語の文章との間に、かく長短の差の
 存するのは、兩者共に業平歌集より派生せるものの、勅撰集たる古今集は、その體裁
 の統一上、あまりに長大なる詞書は適宜これを改める必要があり、伊勢物語も又物
 語としての立場より修正を加へたためと解釋される。第三は古今集に於ては詞
 書なきもの即ち題しらすか、或は極めて簡單なる詞書例へば「みちのくうた」おきの
 ゐみやこじま等を有するか、又は古今集の詞書と伊勢物語の文章と全然相違する
 かの場合で、例へば、

伊勢物語

古今集

<p>12</p> <p>むかしおとこ有けり人のむすめをぬすみてむさしのへゐてゆくほとにぬす人なりけはくにかみからめられにけり女をはくさむらのなかにきてにけにけりみちくるひとこの野はぬす人あなりとて火つけむとす女わひて</p> <p>むさしのはけふはなやきそわかきさのつまもこもれりわれもこもれりとよみけるをきゝて女をはとりてともにゐていにけり</p>	<p>1</p> <p>かすが野はけふはなやきそわか草のつまもこもれりわれもこもれり</p>
<p>59</p> <p>むかしおとこ京をいかゝ思ひけんむかし山にすまむと思ひいりて</p> <p>すみわひぬ今はかきりと山さとに身をかくすへきやともとめてんかくて物いたくやみてしにいりたりければおもてに水そゝきなとしていきいてゝ</p>	<p>17</p> <p>題しらず</p> <p>よみ人しらず</p>

<p>88</p> <p>わかうへに露そをくなるあまの河とわたるふねのかいのしづくかとなむいひていきいてたりける</p> <p>昔いとわかきにはあらぬこれかれともたちともあつまりて月をみてそれかなかにひとり</p> <p>おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人のおいとなる物</p>	<p>17</p> <p>わがうへに露ぞおくなるあまの河とわたる舟のかいのしづくか</p> <p>なりひらの朝臣</p> <p>おほかたは月をもめてしこれぞこのつもれば人のおいとなるもの</p>
<p>112</p> <p>むかしおとこねむころにいひちきりける女のことさまになりければ</p> <p>すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなひきにけり</p>	<p>14</p> <p>題しらず</p> <p>よみ人しらず</p> <p>すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり</p>
<p>118</p> <p>昔おとこひさしくをともせてわするゝ心もなしまいりこむといへりければ</p> <p>玉かつらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし</p>	<p>14</p> <p>玉かつらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし</p>

の如き二十五首がそれである。而してこの二十五首中の大部分が題しらず、讀人しらすの歌なることは、特に注意しなければならない。而して古今集が伊勢物語よりこれ等の歌を取り來つたとは、斷じて認められ得ない所であると同時に、又當時別に古歌集があつて、古今集伊勢物語共にそれに據り、一方は「題しらず」讀人しらす」と記し、一方はこれに詞書を附したものと考へられ得ない所である。必ずや伊勢物語が古今集より取材し、之を物語化したものと考へざるを得ないのである。次に伊勢物語異本(大島本神宮文庫本朱雀院塗籠本爲家本六條本皇太后宮越後本小式部内侍本)の歌と古今集との關係について見る。古今集の歌にして勢語異本にのみ見られるものは十一首あるが、これも二種に分つて考へることが出来る。其一は、

伊勢物語	古今集
むかしおとこならの京にあひしりたる人とふらひにいきたるにともたちのもとにはせうそこをはせてうらみてふみをはや	題しらず
2	

らさりける人のもとに 春の日のいたりいたらぬさとあらしさけるさかざるはなのみゆらん	よみ人しらず 春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかざる花のみゆらん
むかしすき物ともあつまりてものゝなをよみけるにかはたけあるおとこ さよふけてなかはたけゆくひさかたの月ふきかえせ秋の山風	かはたけ かけのりのおほきみ さよふけてなかはたけゆく久かたの月ふきかへせ秋の山かぜ
10	

の如く、古今集に於ては詞書なきか、或はあるにしても、極めて簡單なる場合であり、前記以外にも、

おもひつゝぬれはや人のみへつらむゆめとしりせはさめさらましを(小)
 秋のよもなのみなりけりあふとあへはことそともなくあけぬるものを(神)
 いつはりと思ふものからいまさらになかまことをかわれはたのまん(大神朱小)
 あまのすむさとのしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん(爲小)

今はとて我に時雨のふりゆけはことのはさへそうつろひにける(爲六・越・小)
 人おもふ心このはにあらはこそ風のまに／＼ちりもみたれめ(爲六・越・小)
 こゝろをそわりなきものとおもひぬるかつみるひとやこひしかるへき(神爲
 越・小)

の七首がある。其二は、

伊勢物語	2	古今集
むかしいろこのむ人ありけり男もさまか はらすおなし心にていろこのむ女をかれ をいかてえてしかなとおもひたるを女も ねむしわたるをいかなるおりにかありけ むあひにけりおとも女もかたみにふみ やれは我もいかてすてられしと心のいと まなくおもふになむありけるを女出てい なむとおもふこゝろありて いささくらちらはちりなむひとさかり ありへはひとにうきめみへなむ(下略)(神)	2	うりむるんにてさくらの花をよめる。 そうくほうし いささくら我もちりなむひとさかり有り なば人にうきめみえなん

小	18	小
(前略)その河渡すきて京にみしあひて物語 してことつてやあるといひければ みやこ人いかよととはよまたかみは れぬ雲井にわふとこたえよ(宋)	18	かひのかみに侍りける時京へまかり のぼりける人につかはしける をのよさだき 宮こ人いかにとよはば山たかみはれぬ雲 井にわぶとこたへよ

の二首に見る如く、古今集の詞書と全然相違してゐる場合である。

さて上述したるが如く勢語異本にも存し、古今集にも見える十一首の歌をめぐつて、兩者の間に次の如き種々の關係が考慮せられる。即ち右の歌は(一)古今集より伊勢物語の異本が採録したものであるか、或は逆に(二)勢語異本から古今集が採録したものであるか、又は(三)兩者何れも當時の私家集及び古歌集より取つたものであるかの三の場合がそれである。而して消極的の論據とはいへ、第二の場合、伊勢物語の成立が古今集撰進以後なること、及び古今集が勢語の各異本によつて十二首といふ多数の歌を増補するとは考へられないこと等より、第三の場合、現

存の資料の中にかかる私家集又は古歌集を指摘することの困難であることより、二者は何れも肯定することの出来ない事情にある。又積極的の論據として、伊勢物語には古今集の歌を採録することの多い點に鑒みても、第一の場合が支持されるやうに思はれる。

以上の結果を綜合して判断すれば、古今集にも伊勢物語にも存する歌は、作者より見て(一)業平及び業平と贈答せる他人の歌と、(二)讀人しらすの歌及び業平以外の人の歌とに、詞書より見て(一)兩者の詞書の類似せるものと(二)然らざるものとに分けて考へることが出来、しかも作者よりの分類と詞書よりの分類とは一致して互に矛盾し、衝突するものではない。而して(一)の業平及び業平と贈答せる他人の歌の詞書が、古今と伊勢とに於て類似するのは兩者共に業平歌集に依るためであり、(二)の讀人しらすの歌及び業平以外の人の歌の詞書が一致しないのは、古今集より伊勢物語が取材し脚色したためであると解せられる。古今集と伊勢物語兩者の關係は、單に古今が伊勢に據つて記したものである、伊勢が古今を基として記したものである、兩者が共に業平歌集から引用したものである、兩者共に業平歌集を素材

とすると同時に、伊勢は又古今に取材するといふ三角關係に置かれてゐると解すべきである。

第三項 後撰集



今例を天福本に取つて考察する。伊勢物語にも出で、同時に後撰集にも出でたる歌は、合計十一首を數へることが出来る。この十一首の歌の共通して存在するといふ事實は、兩者の間に何等かの直接關係の存在することを肯定するものであるらうか、或は否定するものであらうか。若し肯定するものであるならば、伊勢物語古意に言ふ如く、後撰集から伊勢物語に採録したと見るべきか、それとも反對に後撰集の編者がこれを伊勢物語の中から選擇したと見るべきであらうか。かかる疑問を明かにすることは、單に兩者の關係を闡明するにとどまらず、伊勢物語の成立年代を決定する重要な契機となるであらう。それ故、先づ右十一首の和歌が、兩者に於て如何に現れてゐるかを綿密に比較し、相互の關係について、あらゆる可能の場合を考慮し、その得失を検討して見る必要がある。

今後撰集の詞書に注意して、比較的伊勢物語に似たる詞書を有する場合(一)と詞書なきか或はあるにしても極めて簡單なる場合(二)とに分類して比較を試みる。先づ前者を擧げると次のやうである。

伊勢物語		後撰集	
7	むかしおとこありけり京にありわひてあつまにいきけるにいせおはりのあはひのうみつらをゆく浪のいとしろくたつをみて いとしくすきゆくかたのこひしきにうら山しくもかへるなみかなとなむよめりける	19	東へ罷りけるに、すぎぬる方戀しく覺えける程に、川を渡りけるに浪の立ちけるをみて、 いとどしく過きゆく方の戀しきに羨ましくもかへる浪哉 業平朝臣
59	むかしおとこ京をいかゝ思ひけんむかし山にすまむと思ひいりて すみわひぬ今はかきりと山さとに身をかくすへきやともとめてん(下略)	15	世の中を思ひうして侍りける頃、 業平朝臣 住みわびぬ今は限りと山里につま木こるべき宿もとめてむ

66	むかしおとこつづくにゝしる所ありけるにあにおとゝ友たちひきゐてなにはの方にいきけりなきさをみればふねとものあるをみて なにはつをけきこそみつのうらことにこれやこの世をうみわたるふねこれをおはれかりて人ゝかへりにけり	17	身のうれへ侍りける時、津の國にまかりてすみはじめ侍りけるに、 業平朝臣 藤波津をけふこそみつの浦ごととこれやこの世をうみ渡る舟
114	むかし仁和のみかとせり河に行幸したまひける時、いまはさることになく思ひけれともとつきにける事なれはおほたかのたかゝひにてさふらはせたまひけるすりかりきぬのたもにかきつけゝる おきなさひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつもなくなるおほやけの御けしきあしかりけりのかよはひを思けれどわかゝらぬ人はきゝおひけりとや	15	同じ日、鷹飼にてかりぎぬの袂に鶴のかたをぬひてかきつけたりける。 翁さび人なとかめそ狩衣今日ばかりとぞたづもなくなる 行幸の又の日なむ致仕の表奉りける。

次に後者即ち詞書なきか、或はあるとしても極めて簡單なる場合を擧げると、次のやうである。

伊勢物語	45	<p>むかしおとこ有けり人のむすめのかしつ くいかてこのおとこに物いはむと思けり うちいてむことかたくやありけむ物やみ になりてしぬへき時にかくこそ思しかと いひけるをおやきよつけてなく／＼つけ たりければまとひきたりけれとしにけれ はつれ／＼とこもりをりけり時はみな月 のつこもりいとあつきころをひに夜ゐは あそひをりて夜ふけてや／＼す／＼しき風ふ きけりほたるたかくとひあかるこのおと こみふせりて ゆくほたる雲のうへまでいぬへくは秋 風ふくとかりにつけこせ(下略)</p>
後撰集	3	<p>ゆく蜚雲のうへまでいぬへくは秋風ふく とかりにつけこせ 業平朝臣</p>

54	61	82	91
<p>昔おとこつれなかりける女にいひやりけ る 行やらぬ夢地をたのむたもとはあま つそらなるつゆやをくらん</p>	<p>(前略)女返し 名にしおはゝあたにそあるへきたはれ しま浪のぬれきぬきるといふなり</p>	<p>(前略)みこにかはりたてまつりてきのあり つね をしなへて峯もたひらになりなむ山 はのなくは月もいらしを</p>	<p>むかし月日のゆくをさへなけくおとこ三 月つこもりかたに おしめとも春のかぎりのけふの日のゆ ふくれにさへなりにける哉</p>
<p>題しらず ゆきやらぬ夢路に惑ふ袂にはあまつそら なきつゆぞおきける</p>	<p>たはれ鳥をみて、 名にしおはばあだにぞ思ふ戯れ鳥浪の濡 衣いく世きつらん</p>	<p>月夜にかれこれして、 おしなべて峯も平になりなむ山のはな くば月もかくれじ かんづけの峯雄</p>	<p>題しらず 惜しめども春のかぎりのけふの又夕暮に さへなりにけるかな 讀人しらず</p>

111

(前略)返し

したひものしるしとするもとけなくに
かたるかことはこひすそあるへき又返し
こひしとはさらにいはいはしつたひもの
とけむを人はそれとしらなん

11

戀しとは更にもいはじ下紐のとけむを人
はそれとしらなむ
かへし
下紐のしるしとするもとけなくに語るか
ごとはあらずもある哉
在原元方
読人しらす

先づ第一に、伊勢物語の編者が右の十一首を後撰集をもととし、これから直接拾録したと想像してみる。この場合には、簡単な詞書を有するか又は全然詞書を有せざる後撰集中の歌が、伊勢物語に取入れられて、歌物語的な形態にまで變化せしめられたと解釋しなければならぬ。この解釋は、古今集の「題しらす」讀人しらすの歌の多くが勢語に攝取される際、物語化されてゐる事實と同じやうに、一見した所、説明としては甚だ便利であるかの如く見えるが、實際は古今集の場合と後撰集のそれとは、次の如き二の差異の存することを認めてかからねばならない。それは(一)古今集中の業平の歌の詞書は、伊勢物語の文章と甚だ密接な關係に在るこ

とを豫想せしめるに充分なものを有するに對し、後撰集の場合にはそれが然らざること、(二)古今集の業平の歌は悉く伊勢物語に存するが、後撰集に於ては必ずしもさうでないことの二點である。今松田武夫氏藏定家本後撰集奥書、宮内省圖書寮藏傳爲世筆本所載の註記、並に契沖の河社の所説等に從つて、後撰集に業平の歌としてあげてある「伊勢の海に頼めつ」の二首を、枇杷左大臣仲平の歌と認めるとしても、尙左の數首を現存伊勢物語に見出し得ないことを注意しなければならぬ。女のもとより、ふみ月ばかりにいひおこせて侍りける。 讀人しらす
秋萩をいろどる風の吹きぬれば人のこころもうたがはれけり
かへし

在原業平朝臣

あき萩をいろどるかせはふきぬとも心はかれじ草葉ならねば

人のもとにしはしはまかりけれど、あひ難く侍りければ、物にかきつけ侍りける。
在原業平朝臣

暮れぬとてねて行くべくもあらずに辿る辿るも歸るまされり

思ふ心ありて、前太政大臣によせて侍りける。
在原業平朝臣

頼まれぬ憂世の中をなげきつつ日陰におふる身をいかにせむ

大井なる所にて、人々酒たうべけるついでに、

業平朝臣

大井川うかべる船のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり

右の如く、五首の歌が、後撰集には業平の歌とされてゐながら、伊勢物語に見えてゐないといふ事實は、古今集と伊勢物語、後撰集と伊勢物語とのそれぞれの關係に同一視すべからざる異つた事情の存在することを意味するものに外ならない。従つて古今集と伊勢物語との關係に適用された説明を、そのまま後撰集と伊勢物語との關係の説明に轉用するのは可成困難であると言はなければならぬ。今假に數歩を譲つて、前述の二つ關係を同一視するとしても、後撰集の「題しらす」讀人しらすの歌までも拾録してその内容の増補を圖らなければならぬ伊勢物語が、何故に後撰集に於て業平の作なりと認定せる數首を逸するといふ編輯態度に出る必要があるのであらうか。全く不可解な疑問に遭遇せざるを得ないのである。

第二に、後撰集の編者が伊勢物語より右の十一首を選択し、採録した場合を考へてみる。元來古今集に漏れた歌を撰集することに重點の一を置いた後撰集の編

纂態度より推せば、伊勢物語が集の重要な素材の一とされることはあり得ることであり、その古今集に見える六十二首以外の十一首が選ばれることも無論あり得べからざることではない。かかる場合に於ては、後撰集の詞書の勢語に比して簡單なる點や、或は單に「題しらす」とのみ記されてゐる點や、歌詞に於ける小異例へば「つま木こるべき」と「身をかくすべき」「いく世きつらんと」と「きるといふなり」等の存する理由は、後撰集編者の改竄の結果としなければならぬ。若しこの説明を一應是認するとすれば、然らば後撰集の編者が如何なる根據によつて、前記を「しなべて」の作者をかんづけの峯雄と認定し、「こひし」とは「の歌を在原元方の作と認定したのであらうか。又集の有する業平の歌に、現存伊勢物語中に見ることを得ない數首の存することは、如何に説明さるべきであらうか。尤も集の卷八、讀人しらすの歌の中に、

秋はてて我身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

とあるのは、古今集卷十五にをのこまの作として、

今はとてわが身時雨にふりぬればことのはさへにうつろひにけり

伊勢物語

と出てゐるものであるから、この歌は作者名を明記しない伊勢物語異本(但し爲家本皇太后宮越後本・小式部内侍本等の如き本なるか否かは明言出来ないにしても)から取られたものではなからうかとも考へられる。もしこの假説にして許されるならば、現存本と幾分異つた勢語を出典として想定することによつて、或は右の困難を解消せしむることが出来るかも知れないが、然しそれとてもあくまで一箇の臆測に過ぎない。

かく考へて來ると、後撰集と伊勢物語との間に、直接的關係を認めるには、古今集の場合に比して、根據とする所著しく薄弱であると言はざるを得ない。しからば、第三の立場として、兩者の直接的關係を全然否定し、専ら間接的關係のみによつて、右の疑問を解決することが出来るであらうか。この點に關して、前記を「しなべて」^{「こひしとは」}の作者についての疑問を再び取上げてみる。古今和歌集目錄によれば、上野峯雄は早く承和頃の人であり、在原元方にしても古今集に十四首の和歌を残して居り、古今集の撰定以後四十數年を経て成立せる後撰集の頃には、彼等の歌は無論古歌として扱はれ、從て作者に關する異説も存してゐたであらう。よつて

それ等の歌を先づ伊勢物語が收用し、他方後撰集が拾録するやうな場合がないとは限らない。又後撰集はその材料として異本の業平集の如きものを使用したのではないかと想像されないこともないが、この想像に對して強ひて否定すべき資料も存しないのである。

第四に、後撰集編纂の材料となつた勢語と、逆に後撰集に取材したそれと、二種の伊勢物語を想像し、勢語と後撰とを二重に關係づける見方も可能である。それにして、秋萩を以下の歌の問題は依然未解決のまま残される。要するに伊勢物語と後撰集との關係は甚だ重要であるが、後撰集の杜撰な編纂に禍せられて、遂にこれが解決を期することは至難とせざるを得ない。

第四項 拾遺抄並に拾遺集

伊勢物語の中に拾遺抄に入れる歌の二首存することは、鎌倉末期の書寫に係る大島雅太郎氏藏傳爲氏筆本に已に指摘するところで、第十一段「わするなよほどは雲井に云々の歌に、

在拾遺抄。忠元歌言語相違也。橘基忠、人にかよふころとをきところへまかるとして、

と註し、第七十一段「ちはやぶる神のいがきも云々」に對しては、

萬葉集并拾遺抄には人丸歌、ちはやぶる神のやしろもこえぬべしいまはわが身のをしげくもなし、無返歌。

と記してゐる。この二首の中で「ちはやぶる」は萬葉集と伊勢物語との關係の項に於て考證せる如く、勢語と拾遺抄とを直接聯繫せしめるものでない。従つて二者の間に直接的な關係が認められるか、單に間接的な關係だけしか認められないか、換言すれば伊勢物語から拾遺抄が取つたか、拾遺抄から伊勢物語が取つたか、或は又兩者何れも他から取つたかといふ問題は、かかつて「わするなよ」の歌一首にあることとなる。今右の歌が、兩者に於てそれぞれの詞書に如何なる相違を示してゐるか、次に比較して見よう。

II	伊勢物語	拾遺抄
昔おとこあつまへゆきけるに友たちとも	橋ただもとが人のめにしのびても	

にみちよりいひをこせける わするなよほとは雲になりぬともそ らゆく月のめぐりあふまで	いひ侍ける頃、遠所まかるとして、その女 のもとにつかはしける。 わするなよ程は雲井になりぬ共空行月の めぐりあふ迄
--	--

右の歌は、拾遺抄のみならず、又拾遺集にも出てゐる歌であつて、從來屢々問題視され、人々の注意を喚起して來たものである。例へば、細川幽齋の伊勢物語闕疑抄には、

拾遺集第八には直幹が歌と有り、此物語には業平の歌とす。如此古歌萬葉の歌などをかへて書事多し。但是について稱名院殿新義に、直幹が歌ならば、人のむすめにしのびて物いひ侍りける頃、遠き所にまかり侍とて、此女のもとにいひつかはしける、橘直幹とありてつぎに歌あるべきを、詞書に橘のたゞもとが人のむすめ如此有り。業平の歌を爰に似合たれば、書て送りたり、とあそばす。此義おもしろし。

と言ひ、契沖の勢語臆断には、

拾遺集雜上に、此歌を載せたる詞書にいはく、たぢばなのたゞもとが、人のむすめにしのびて物いひ侍りけるころ、遠き所にまかり侍るとて、この女のもとにいひつかはしけるとあれば、直幹が歌なり。いづれと知がたし。人のむすめにとかき出して、常のごとく作者をいふ所に橋のたゞもとと有ぬべきを、初にたぢばなのたゞもとがとある故に、猶なりひらの歌をかきてつかはせる歟といふ義もあれど、さらばたゞなりひらの歌にて有なん。古今に、あま雲のよそにも人のなりゆくかといふ歌の詞書にも、なりひらの朝臣、きの有つねがむすめに住けるを、恨ることありてなどかきて、後に名をいはず。此たゞひと知べし。但古來風體抄に、遠き所にまかるとて、女につかはしける、大江爲基、とて此歌あり。彼抄こと書どもは心を得て、つゞめてもかゝれたる事おほければ、此ことがきも然るべけれど、作者をつげられたるにて思へば、古本は、たぢばなのたゞもとがむすめにしのびて物いひ侍りけるころ、遠き所にまかり侍るとて、この女のもとにいひつかはしける、大江爲基、と有けん、後にうつす人作者をおとしけるにや。さては心得がたければ、ただもとがといふ下に人のといふ

ことの落て、たゞもとが歌にやと思ひてかきそへけるにや。

とあり、荷田春滿の伊勢物語童子間には、

拾遺に直幹が歌とみえたれば、直幹が歌なるべし。此物語は作物語なれば、證據には成がたし。虚事の證據にはするとも、實事の證據に取用へからず。直幹が歌なるを作者しりて、昔男の歌として物語の一條にしらへたるにて、この物語の全篇にもわたる證となるべし。しかるを此物がたりには、業平の歌とすと有は、作者の意とす。違べし。此物語に業平の歌とはせず、昔男とありて名もしれぬ男の歌とこそすれ。業平とはなきを、後人昔男を皆業平とする目より、作者の本意にもたがふなるべし。その上拾遺にては、雜の部には入たれど、戀の歌也。しかるを此物がたりにては、友だちどもに道よりいひおこせけるとあれば、旅の歌にして戀歌にもあらず。此實事を虚事に作り替たる、作物語の意趣なり。もし疑らくは、伊勢物語は拾遺よりも後の作物語か。大概は後撰の後、拾遺の前ともみゆれども、猶證據を求むべし。貫之并順等の歌も伊勢物語にあれば、後撰より後の物とはみえたり。此拾遺の直幹が歌によれ

ば、拾遺よりも後の作物語といふともいはるべし。

と言ひ、次いで賀茂真淵の伊勢物語古意には、

○こは拾遺集に、橘のたゞもとが人のむすめにしのびて物いひ侍りける比、とほき所にまかり侍るとて、此女のもとにいひつかはしけると端書して入たれば、直幹の歌なるを、こゝに似付たれば、一條とせる也。是も又此文は、村上の御代の末に書たる一つの證也。

といひ、又その頭註にも、

或説に、歌の右に直幹とするさぬにつきて、こは本は業平の歌なるをたゞもとては更にいひぬ例なるをも思ひはからず、もとより此文は他の歌をあつめて作れるをも心得ざる故也。直幹は後撰集におもひやる心ばかりはさはらじを何へだつらん峯の白雲てふ歌もありて、口つき相似たり。かつ此人は天曆の比までありし博士也。

とある。又藤井高尙の伊勢物語新釋にも、

さてこれは拾遺集なる橘直幹の歌を出して、はしの詞をつくりかへたるなり。と述べてゐるが、鎌田正憲氏は考證伊勢物語詳解に左の如き見解を發表されたのである。

この歌拾遺雜上に、橘のたゞもとが人のむすめに忍びて物いひ侍りける頃、遠き所にまかり侍るとて、此女のもとにいひ遣しける」とあり、古意新釋ともにこれによりて作爲したりとせり。今此歌を見るに、歌のさま到底業平のものにあらず。又この物語にいはゆる「友だち」にいひやれるものとしては、端の詞と歌のこゝろうち合はず、尙ほこの拾遺の詞書にある如く、男遠き所にゆくにつけて、忍びてかよへる女にいひやれるものと見えたり。而して橘のたゞもとゝは尊卑分脈を按ずるに長成の子直幹の弟にして、天曆の頃駿河の守たり。

(古意新釋等、たゞもとを直幹に誤れり。たゞもとは忠幹にて、直幹の弟、尊卑分脈拾遺續古今作者とあり)。蓋しこの歌その駿河守として赴任の時などの作ならむ。而してこれをこゝに入れたる全く後人の造工なり。この物語、記者の一つの物語あれば、それに類したる他の物語をそのつゞきにとり集めたる

意匠にさし加へたる造工也。

とあるが、かくこの一首をめぐらる問題は、從來主として拾遺集との關係に於て論議されてゐるが、これは先づ拾遺抄の場合に於て考證されねばならない。

さて第一に、拾遺抄が伊勢物語から採つたものとして、その場合を考へて見よう。今若しこの兩者の親しい關係を承認するならば、前者の詞書は後者の端書より發展したものであることを無論肯定しなければならぬ。然し物語ならばいざ知らず、撰集に於ては、その素材に對して、前に比較せる如き甚だしき詞書の變更が何等かの根據なしに行はれ得るであらうか。これは頗る疑問としなければならぬ。筆者はむしろ拾遺抄が伊勢物語を素材としたとする場合を否定したいと思ふのである。

第二に、伊勢物語が拾遺抄から採つたと想像してみる。この場合には兩者の詞書の相違を説明するに甚だ好都合ではあるが、同時に伊勢物語の成立を拾遺抄の成立以後に引下げて考へることも、當然要求されるであらう。和田英松博士の説に従へば、拾遺抄の成立年代は長徳三年七月より長保元年十二月までの二年半

程の間に限定されてゐる。然るに、伊勢物語の中でも朱雀院塗籠本は、その奥書並に伊勢物語抄の記事を信すれば、高二位成忠本であり、少くとも高階成忠の歿せる長徳四年以前に成立してゐなければならぬ。従つて伊勢物語が拾遺抄から直接採録したとも、簡單には言はれないやうである。しかし、若し「わするなよ」の一首を、一旦成立せる伊勢物語に、拾遺抄より採つて増補したものと考へるならば、かかる非難は當らないのではなからうか。増補の方法に於て、何人にも容易に想像され得ることは、卷末に附加される場合であらう。かの小式部内侍本が卷末にこの歌を有してゐるのは、自ら右の事情を説明するものではなからうか。然し、これも小式部内侍本の段序が明白にされない以上、いづれともにはかに斷定することは困難である。

第三に伊勢物語拾遺抄の間に直接の親子關係を認めず、むしろ兩者其他の材料より拾録したと見て、間接的な連鎖のみを想像する立場がある。この立場にはさして不都合な難點があらはれて來ないだけに、前二者に比して無難であるかも知れない。

次に伊勢物語と拾遺集との間には、如何なる關係が存在するのであらうか。前者が後者をその素材の一としてゐるか、それとも逆に前者が後者の材料の一部分となつてゐるか、或は兩者は相互に幾つかの素材を共有することによつて連繫されてゐるか。この謎を解くべき鍵は勢語拾遺その何れにも存する所の六首の歌即ち「わするなよほどは云々」天福本第十一「段拾遺集第八」そめ河をわたらむ云々「天福本第六十一「段拾遺集第十九」ちはやぶる神の云々」天福本第七十一「段拾遺集第十四」いはねふみかさなる云々「天福本第七十四「段拾遺集第十五」浪まよりみゆる云々」天福本第十六「段拾遺集第十四」近江なるつくまの云々「天福本第二十「段拾遺集第十九」以上の歌に秘められてゐるのである。而してその中の「ちはやぶる」「いはねふみ」「浪まより」の三首が直接萬葉集より拾遺に採られ、勢語との間に間接的關係しか認め得ないことは、既に論證した所であり、「わするなよ」は拾遺抄に於て論述し盡したつもりである。仍てこれ等を除外すると伊勢物語拾遺集の關係を闡明する最も重要な資料は、僅かに二首の歌に制限されることとなる。今この二首が兩者に於て如何に現はれてゐるか比較すると、

伊勢物語	拾遺集
<p>61 昔おとこつくしまていきたりけるにこれは色このむといふすき物とすたれのうちなる人のいひけるをきよて そめ河をわたらむ人のいかでかは色になるてふことのなからん<small>(下略)</small></p>	<p>19 染川をわたらむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ <small>在原業平朝臣</small></p>
<p>120 昔おとこ女のまた世へすとおほえたるか人の御もとにしひてものきこえてのちほとへて 近江なるつくまのまつりとくせなんつれなき人のなへのかすみむ</p>	<p>19 いつしかも筑摩のまつりとくせなむつれなき人の鍋の數みむ</p>

若し伊勢物語がこの二首を拾遺集より採つて増補したとするならば、拾遺集第十二に存する業平の歌即ち

女に物いひはじめて、さはること侍りてえまからで、いひつかはし侍りける

かからでもありにしものを白雪の一日もふればまさる我が戀を何故拾録しなかつたのであらうか。いやしくも業平の名が明白に出てゐる歌を見逃してゐるとは、奇怪なことと言はねばならぬ。筆者はこれを以て伊勢物語が拾遺集より材料を得たとする見方を否定する根據としたと思ふ。

然らば、逆に、拾遺集が伊勢物語より材料を採るといふ如き場合はあり得ないであらうか。恐らくあり得ると思はれる。かの勢語の異本と認むべき神宮文庫本や、小式部内侍本にのみ見える左の歌は、拾遺集にも存する。この事實はかかる場合のあり得ることを立證するものである。

伊勢物語	拾遺集
むかしおとこはるかなるほとにゆきたりけるにつくしのつと人のこひたりけるにいろかはやるとてつくしより愛まてくれとつともなしたちのをかはのはしのみそある(神宮文庫本)	7 をがはのはし 在原業平朝臣筑紫よりここ迄くれど菴もなしたちのをがはのはしのみぞある

次に前掲の「近江なる」の如き古歌が先づ遊離して存在し、それを一方には伊勢物語が取り、他方には拾遺集が取るといふ場合も、亦あり得ることと思はれる。要するに伊勢物語と拾遺集との關係は、大體如上の二つの場合に限られてゐると見ることが出来るではないかと思はれるのである。

第五項 古今和歌六帖

伊勢物語の歌で古今和歌六帖に見えるものは、其數六十八首の多きに達してゐる。然しこの全部が伊勢物語から採られたか否かは疑問で、例へば右の中の萬葉集に存する五首、古今集に見ゆる三十三首、後撰にある六首を除くとすれば、直接伊勢物語と交渉を持つものとしては、二十三首に減少するであらう。それにしても、このやうに相等な數の和歌を共有することは、兩者の間に密接な關係の存在することを示すものでなくてはならない。萬葉集伊勢物語・古今和歌六帖の何れにも存する五首の歌の關係については、既に述べたから省くこととして、ここには古今集・伊勢物語・古今和歌六帖の三者の各に存する三十三首が、相互に如何なる交渉を

有するかについて考へて見よう。

先づこれらの歌の作者を比較するに、古今集に作者名を註したる歌にして古今和歌六帖に作者名を註せざるもの七首、古今に於て讀人しらすとした歌であつて、六帖に於てその作者名を挙げたもの四首、古今には讀人しらすとある歌であつて、六帖にも作者名を挙げざるもの四首、兩者共作者に關する限り一致するもの十八首、即ち更に要約すれば、兩書に於て作者の一致するもの二十二首、せざるもの十一首といふ結果を示す。而して伊勢物語にあつては、その歌の作者を明記しないのを原則とするから、古今六帖相互の間に可なりの相違が存しても、大體右の歌は古今集から類聚したものと考ふべきであらう。

次にかかる考方は、歌詞の異同の方面よりしても肯定されて差支ないことと思はれる。勿論歌詞の嚴密なる異同を論ずる時には、古今六帖の本文校定から出發しなければならぬが、到底さうした餘裕もないことであるから、ここでは單に概説するにとどめる。古今集に於ては、貞應本を、伊勢物語に於ては、天福本を取つて、古今和歌六帖と比較するに、三者の歌詞の一致せるもの二十三首、一致せざるも

の十首と計算される。この十首の歌に於ては、六帖のそれは古今集よりむしろ伊勢物語に近いものがあるが、しかし若し古今集にして元永本を用ゐるならば、はかに何れに近いとも稱し難いであらう。

要するに古今六帖の右の三十三首については、伊勢物語との直接的關係を強て否定することは當らないかも知れないが、大體に於て古今集より取られたと考へて差支ないと思はれる。但し六帖の編者の使用した古今集が、果して元永本の系統であつたかどうかは、にはかに斷言出來ないことは勿論である。

次に伊勢物語後撰集、古今和歌六帖の何れにも存する六首を問題として、三者の關係をしらべて見よう。後撰六帖の兩者に於ける右の六首の作者名を比較すれば、一致するもの四首、前者に記入せられてゐて後者になきもの二首といふ割合であり、歌詞を對照すれば略相近く、大體に於て六帖が伊勢よりも後撰を素材として採用したと解釋するを至當とすべきである。

右の結果に鑑みれば、伊勢物語より直接古今和歌六帖に拾録されたものは、二十三首と計算される。元來六帖所收の和歌に對して記入された作者名には、相當疑

間視すべきものの存することは周知の事實であるが、右の二十三首に關しては、業平と明記せる歌は四首であつて、残の十九首は何れも作者名を擧げてゐない。かく作者を明記しない歌が多いといふ點を以て、これ等が伊勢物語より採られた一證左となすことも可能であらう。但し右の中には、果して伊勢物語と直接の關係ありや否やを疑はしめる二首が含まれてゐることを注意しなければならぬ。それは天福本に、

あつさ弓ひけとひかねと昔より心はきみによりにし物を(第二十四段)

鳥のこをとをつゝとをはかさぬともおもはぬ人をおもふものは(第五十段)とあるが、六帖には、

梓弓末のたづきは知らねども心は君によりにし物を(第五)

とりの子を十づつ十はかさぬとも人の心をいか頼まむ(第四)

と見えてゐるのがそれである。これ等は或はもと何れも古歌であつたものを、伊勢物語に於て、歌詞を修正の上採用したかとも考へられるのである。

又勢語異本例へば神宮文庫本・朱雀院塗籠本・小式部内侍本等にのみ存する歌が、

六首六帖に入つてゐる。この事實の間に如何なる關係が見出し得られるであらうか。その六首とは、

こゝろをそわりなきものとおもひぬるかつみるひとやこひしかるへき(神爲皇・小)

秋のよもなのみなりけりあふとあへはことそともなくあけぬるものを(神)

おもひつゝぬれはや人のみへつらむゆめとしりせはさめさらしを(小)

都人いかゝとは、山たかみはれぬ雲ゐにわふとこたへよ(朱)

白露をけたて千とせはありぬともいかゝたのまん人の心を(朱)

大原哉堰之志水尾結上而飽哉與問志人者筭者(眞・神・朱爲皇・小)

である。而して、右の中最初の三首は、古今集古今和歌六帖何れも作者を深養父・小町・小町とせる點に徴して、たとひ四首目の「都人」の歌のみ六帖に作者を明記しないとは言へ、何れも古今集より取り來れるものと推定される。最後の二首は六帖では、

置く露をけたで玉とはなしつとも人の心をいかが頼まむ(第四)

大原やせか井の水を手に汲て鳥は鳴とも遊てゆかむ(第二)
となつてゐて、恐らく古歌であつたものを、伊勢物語は修正して拾録し、六帖は原作より直ちに採録したと見なされ、勢語異本と古今六帖との間には、直接的の交渉は肯定し難いと思はれる。

第六項 業平集並に其他の私家集

業平朝臣集の名に於て、現在我々に示されてゐる傳本としては、歌仙家集本と、群書類従本とがある。筆者は數年來、この集の異本——特に伊勢物語の粉本とすることの出来るやうな異本を求めてゐるが、まださしたる古寫本に逢着することが出来ない。前田侯爵家藏の在中將集の如きは、少い異本の中で最も注意すべき古寫本の一である。まだ一般に知られてゐないやうであるが、この本には奥に、

本云 此集家本先年爲人被借失、依爲缺卷、老後書之、漏歌多歟

寶徳元年十二月十五日以定家卿眞筆書寫之畢 准三宮義運

寶徳三年十一月十二日於室町殿御前拜領之

(花 押)

とあつて、これ等の奥書によつて、この本は定家眞筆本を義運諸門跡譜實相院の條に増詮大僧正園城寺長吏、准三后、改義運、一身阿闍梨、新續古今作者とあり。足利滿詮の子、義滿に養はるが書寫し、それを足利義政から花押の主が拜領したのであることが分る。而してここに存する花押の主が飛鳥井榮雅なることについては明證がある。

さて業平集の歌仙家集本はわづかに四十六首、類従本は五十九首、いづれも古今集、後撰集、伊勢物語等から抄出したもののやうである。本願寺本三十六人集中のものも、ほぼ類従本と同様である。前田家本は此等の諸本と大體同系統の本といふことが出来るが、歌數は實に八十二首の多きに及ぶ。しかも類従本にのみあつて前田家本にない歌はわづかに、

一、たのめつゝあはで年ふるいつはりこりぬ心を人はしらなん
かへし

二、夏蟲もしるしるまどふおもひをばこりぬあはれを誰かみざらん

三、よひのまにはやなぐさめよいそのかみふりにし床もうちはらふべく

四、伊勢の海にあそぶあまともなりにしか波かきわけてみるめかづかん
五、わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ
六、暮れぬとてねてゆくべくもあらくなくに泣くなくも猶かへるまされり
の六首にすぎないが、右の中第五は明かに行平の作である。第一と第二とは枇杷
左大臣仲平と伊勢との贈答歌であつて、歌仙家集には之を缺く。第五以外の歌は
いづれも後撰集に出で、第三を除くほか皆業平の作と記してゐる。これについて
は已に契沖が河社に於て、

右三首よひのまに伊勢の海のたのめつゝの歌、後撰集にもなりひらとて載た
れど、思ふに枇杷左大臣こそ初いせにはかよはれたれ、業平は時代たがへり。
伊勢家集にも枇杷殿なれば、なかひらをなりひらと見損じてうつせる人の誤
れる歟。在原とかける氏も、藤原をあらためかける歟。いかさまにも、歌はか
ならず枇杷殿にて、後撰のかきやうはうたがはし。

と指摘してゐる。第六の歌は、歌仙本にも後撰集にも、共に業平の歌として載せて
ゐるが、在中將集に載せてゐないのは集が漏らしたのか、それとも他の四首の如く

後撰集撰進の時か、或は後撰集轉寫の際かに誤つたのか不明である。此等の部分
について後撰集の古寫本に徴するに、悉く流布本の通りであるのみならず、松田武
夫氏藏定家本の一本にはその奥に、

或先達云、此集作者名等頗狼藉、故者公卿三位以上多書姓名朝臣許、又女歌等多
書如童名物、枇杷大臣歌、書業平朝臣名、此等之類後人多成不審、或以今案推而書
改、此事不可然、只存此集之習由不可改直歟、上古事暗難決、只可用舊本之說

とあつて、これは定家の記する所ではないかと言はれてゐる。又宮内省圖書寮藏
の傳爲世筆本には、伊勢の海の歌の作者、在原業平朝臣の所に「杷枇杷大臣歌也。諸本
如此非書寫誤」と註してゐるが、この勘物も定家らしく想像される。これ等から推
せば、流布後撰集の如き形は、可なり古い時代に始まつてゐたものと解すべきは勿
論、一步進んで後撰集撰進當時の誤りとも目し得られるかと思はれる位である。
翻つて古今集と在中將集とを比較するに、古今集中に出でたる業平の歌はほと
んど全部がこの集に見出される。但し

(一)貞應本古今集にあつて在中將集にない歌

卷七 ほりかはのおほいまうちぎみの四十賀九條の家にてしける時によめる

在原業平朝臣

さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなるみちまがふがに

(二)在中將集にあるが貞應本古今集では読人不知となつてゐる歌

卷一 題しらす

よみ人しらす

ちりぬればこふれどしるしなき物をけふこそ櫻をらばをりてめ

右の二首が例外であるが(一)については元永本筋切の如き系統の諸本は作者を「業平」とせず「行平」としてゐるのみならず、清輔本さへも「行平」としてゐるのであるから、たとひ貞應本と一致せずとも、集に載せないことを正當と認むべきである。次に(二)にあつては、貞應本はじめ諸本は読人不知としてゐても、元永本筋切等は、前の歌の作者業平朝臣に對して同人と明記してゐる。さればこの歌を、元永本の如き本によつたと思はれる在中將集が、業平の歌として載せてゐるのは決して不當ではない。これと同じ例が後撰集に於てもある。それは、

卷十七 思ふ事侍りけるころ志賀にまうでて

世の中をいとひがてらにこしかどもうき身ながらの山にぞありける

といふ讀人知らずの歌が集に載つてゐることである。これはその二首前に業平の歌のある所から、誤つたものとも解せられる。が恐らくはさうでなく、他の根據によつて、業平の歌と見たのであらう。

以上の考證によつて、在中將集は後撰集よりも、より以上古今集に關係が深く、同じ古今集に於ても元永本や筋切の如き本によつてゐることが明白になつた。次にこの集と伊勢物語との交渉について考へて見よう。先づ伊勢物語について言ふに、伊勢物語中の歌にして集に出づるもの七十三首(中連歌一首)その中業平の歌五十九首半、業平以外の人の歌十三首半である。別に顯昭が異本にありとする「見も見ずも云々」の歌が一首ある。これをもつて見るに、集の歌はほとんど伊勢物語の歌であるといふことが出来る。更に兩者の關係については、嚴密な本文校合の結果、大體次のやうなことが言へるやうである。即ち在中將集は伊勢物語の本文と關係がある。しかし物語が集の本文を敷衍したものでなく、集が物語の本

文から抄出したもののやうに考へられる。例へば集に、

夏の夜風すゞしうふきてほたるとびあがる

行くほたる雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりにつげこせ

とあるのは、伊勢物語に、

むかしおとこ有りけり人のむすめのかしつくいかてこのおとこに物いはむ
と思けりうちいてむことかたくやありけむ物やみになりてしぬへき時にか
くこそ思ひしかといひけるをおやき、つけてなくなつたりければま
ひきたりけれとしにければつれづれとこもりをりけり時はみな月のつこも
りいとあつきころをひに夜ゐはあそひをりて夜ふけてや、す、しき風ふき
けりほたるたかくとひあかるこのおとこみふせりて

ゆくほたる雲のうへまでいぬへくは秋風ふくとかりにつげこせ

くれかたき夏のひくらしなかわれはそのこと、なく物そかなしき

とあるのから抄出したものであつて、集に追補したものと考へられない。かく
の如き例は非常に多く、一々あげるのも煩雜であるから、ここにはすべて省略する。

かく在中將集は現存業平集としては最も古いものの一であらうと考へられる
が、古今集特に元永本筋切等の系統の本及び伊勢物語等より抄出して編纂された
第二次的業平集で、決して伊勢物語古今集に先行したそれではない。従つて第一
次の業平家集の形態は、在中將集より直ちに推定し得られるものではなく、古今集
と伊勢物語との比較研究によつてのみ、その輪廓の大體を想像し得るに止まるで
あらう。

現存伊勢物語中、業平家集に存してゐたと推定される章段を、若干指摘したもの
に、窪田空穂氏と品田太吉氏との研究發表がある。窪田氏は、日本文學講座伊勢物
語研究に於て、二條の後(第二段)第三段第四段第五段(東下り)第八段第九段(惟喬親王
(第八十二段)第八十三段)河原院(第八十一段)伊勢齋宮(第六十九段)を挙げ、其他紀有常
に關したものの、兄の在原行平に關したものの、又文徳天皇の女御たかき子の佛事に關
したものの等、殆どさうであると思はれると言はれ、更に要約して大體業平の歌の名
譽を中心としたものは、家集から捉へてゐるものではないかと思はれると言はれ
てゐる。品田氏は日本文學論纂中の伊勢物語新考に於て、四段(西の對の春や昔)五

段「垣のくづれ」六段「あばらなる倉」七段「すぎゆく方」九段「東國くだり」十二段「武藏野の草むら」十六段「紀の有常」四十一段「うへの衣」六十九段「伊勢の齋宮」七十七段「右の馬の頭」七十八段「山科の宮」八十一段「かたる翁」八十二段「なぎさの院」八十三段「小野の山里」八十四段「さらぬわかれ」八十五段「むつきまうで」八十七段「布引の瀧」百一段「怪しき藤の花等をそれとして指摘されてゐる。

思ふに古今集は勅撰集であつて、多くの私家集から秀歌を厳選したのであるから、たとひ業平の歌であつても、その家集の凡ての歌を採録するが如きことは、到底なし得られないことである。七かし伊勢物語は一面に於て集成業平集としての性質を有するを以て、恐らくその當時傳へられ、知られてゐたほどの歌ならば、一首たりとも漏らすことなく拾録しようと思つたものであらう。然らば今その一々を嚴密に指摘し得ないにしても、少くとも伊勢物語は古今集に存する業平の歌及びそれと直接贈答の關係に置かれてゐる歌以外にも、業平家集の歌を包含してゐると解すべきものと考へられるのである。

業平集以外の私家集に於て、直接的なると間接的なるとを問はず、とにかく伊勢

物語と何等かの交渉を持つものを求めると、柿本集家持集猿丸集小町集素性集敏行集伊勢集等がある。

現存人麿集は、傳本の相違に随つて、歌にもかなりの増減が認められるが、今群書類從所收の柿本集によつて、勢語に關係ある歌のみを拾へば、神風やいせの濱萩、岩ねふみかさなる山は「君があたりみつゝを、らむ」千早振神のいがきも「波まよりみゆる小島の」夕づくよ曉かたの「六首を數へる。而して右は何れも萬葉集に存する歌で、その勢語との直接關係を認め得ないことは、萬葉集と伊勢物語との關係を考察する際に述べた通りである。

次に家持集に於て、勢語に關聯せる歌を求めると、

君はいさわすれやすらむ玉桂かげにみえつゝ、わすれぬ物を

白露はけなばけな、むきえずとも玉にぬくべき人もあらしを

の二首を擧げることが出来る。この第一の歌は萬葉集に存するもので、歌詞より見て集が萬葉より轉載したと考へられる。然し第二の歌は集より勢語が選擇したと推定するか、又は遊離せる古歌を兩者共に採用したと認めるべきであらうが、

しかし現存家持集の成立時期が不確實であるから、今にはかに斷言することは出來ない。

傳爲氏筆本伊勢物語は、猿丸集と勢語との交渉について、

此歌猿丸太夫集にあり。

むさしのはけふはなやきそわかくさのつまもこもれり我もこもれり

古今讀人不知。この歌伊勢の集にあり。猿丸集にあり。

あだなりとなにこそたてれ櫻花としにまれなる人もまちけり

古今第二讀人不知。

ほとゝぎすながなくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思ふ物から

この歌猿丸集にあり。ことばには、あだなりける女に物いひそめて、たのもしげなき事をいふほどにほとゝぎすなきければ、とあり。

古今十三題讀人不知。但猿丸太夫集にあり。

いたづらにゆきてはきぬる物なれどみまくほしさにいざなはれつゝ、

の四首を擧げてゐるが、むさしのは「あだなり」と「いたづらに」の三首は何れも現存本

に見出すことの出來ない歌である。前田侯爵家藏清輔本古今集は集の歌二十二首に對して、在猿丸集「猿丸集詞云」等の頭註を加へてゐるが、右の三首にはこれがない。然らば傳爲氏筆本の使用せる猿丸集は、清輔の所持せる本とも、現存諸本とも、著しく相違せる異本であつたのかも知れない。現存猿丸集例へば本願寺本群書類従本歌仙歌集本宮内省圖書寮藏兩本等)の間に於ても、亦その歌數・歌詞・端書に種々の相違が見られるが、今宮内省圖書寮藏一本と勢語との關係を考察する。この圖書寮本は奥に「本云、以清輔本校了」と記されて居り、清輔本古今集が猿丸集にあるとする二十二首を含み、且詞書は清輔の引用と略一致するなど大體清輔の所持せる猿丸集に近い系統と思はれる本であるが、この中に、

あづさゆみすゑのたづきもしらねどもこゝろはきみによりにけるかな

あだなる女にもものをいひそめて、たのもしげなきなどいひける程にはとゝぎすのなきければ、

ほとゝぎすながなくさとのあまたあれば猶うとまれぬおもふものから

ゆふづくよあかみやみのあさかげにわが身はなりぬ戀のしげきに

の三首を見出し得る。第一の「あづさのゆみ」は古今六帖に「梓弓末のたづきは知らねども心は君によりにし物を」とあつて、猿丸集の歌詞は伊勢物語のそれより古今六帖に類似し、第三の「ゆふづくよ」の五句は萬葉集に於ては「汝手念金丹神宮文庫本伊勢物語に於ては「こひのしげきに」小式部内侍本伊勢物語に於ては「きみをこふとて」とあつて、猿丸集はこれ等の中神宮文庫本に最も接近してゐる。按ずるに、前者に於て猿丸集と古今六帖の歌詞に類似せるは、六帖が猿丸集より採つたものであることを意味し、勢語と猿丸集との相違せるは、勢語が猿丸集より抄出の際修正したためと解釋される。又後者に於て萬葉より伊勢に近似せることは、兩者の密接な關係を示すものに相違ないが、その何れが早いかはにはかに斷定し難い。殊にこの歌は、猿丸集、伊勢物語共に、傳本によつてはある本もあり、ないものもある丈に、決定は一層困難とされる。第二の「ほとゝぎす」の歌は古今集に詞書なく、猿丸集はこれを有するが、勢語とは必ずしも一致しない。従つて勢語はむしろ古今集より抄出したと見るべきであるかも知れないが、第一、第三の二首は猿丸集を原據としたとも解釋出来るやうに思はれる。

次に小町集と伊勢物語との交渉を考へてみる。群書類従本小町集を検するに、勢語に關係ある歌は、

つねにくれど、えあはぬ女のうらむる人に、

みるめなき我身をうらと知らねばやかれなで蟹の足たゆくくる

ゐでのしまといふだいを、

おきの井でみをやくよりも悲しきは都しまへの別れなりけり

かたみこそ今はあだなれこれなくば忘るゝ時もあらし物を

の三首がある。而して第一の「みるめなき」は、詞書の比較の結果、小町集より直接抄出されたと解されないこともないが、むしろ古今集を経てゐるものなることは、勢語と古今集とを對照することによつて明白である。

伊勢物語	25	むかしおとこ有けりあはしともいはさりける女のさすかなりけるかもとにいひやりける
古今集	13	なりひらの朝臣

秋ののにさゝわけしあさの袖よりもあはてぬる夜そひちまさりける色このみなる女返し
 みるめなきわか身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくくる(天福本)

秋ののにさゝわけしあさの袖よりもあはてこしよぞひちまさりける
 みるめなきわか身を浦としらねばやかれなてあまのあしたゆくくる(貞應本)

小野小町

右に見る如く、古今集に於て業平の歌と小町の歌とが、たまたま並列されてゐたために、勢語の編者が直ちにこれを取つて一段を構成したものと推定される。

次に勢語異本に關係ある歌は四首存するが、今小町集古今集勢語の三者を比較してその交渉を考へてみよう。

12	古今集	小町集	伊勢物語
題しらず 小野小町 おもひつゝぬればや人のみえつらん夢としりせばさめざらましを	ゆめに人のみえしかば、 思ひつゝぬればや人のみえつらん夢としりせばさめざらましを	むかし色このみたへにし人のもとより、 おもひつゝぬればや人のみへつらん夢としりせばさめざらましを(神)	

15	13		
秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞともなくあけぬる物(貞)	をのゝこまち 秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞともなくあけぬる物(貞)	人と物いふとてあけしつとめて、かばかりながきよになにごとを夜もすがらわびあかしつるぞとあいなうとがめし人に、 秋の夜も名のみなりけりあひとあへば事ぞともなく明けぬる物(群)	むかしおとこきてかへるに秋の夜もむなしくおほへけれは 秋のよもなのみなりけりあふとあへばことぞともなくあけぬる物(神)
今はとてわが身時雨にふりぬればことのはさへにうつろひにけり 返し 小野さだき	忘れぬるなめりとみえし人に、 今はとて我身時雨と降りぬれば言の葉さへにうつろひにけり かへし 人を思ふ心この葉にあらば	むかし有けるいろこのみの女あきつかたになりておとこのもとに、 今はとて我に時雨のふりゆけはことのはさへそうつろひにけるかへし 人もおもふ心このはにあらはこそ風のまに／＼ちりもみたれめ(爲六皇小)	

人を思ふ心この葉にあらば
こそ風のまに／＼ちりもみ
だれめ(貞)

こそ風のまに／＼散りもま
がはめ(群)

以上の比較によれば、我々は小町集の詞書と勢語異本の本文との間に、さして深き交渉を認めることは出来ない。恐らく伊勢物語と現存小町集とは、直接的關係薄く、小町の歌は、主として古今集を経て伊勢物語に收用せられたと見て、大過ないと思はれる。

次に敏行集に存する勢語の歌は、二首(歌仙家集本)或は一首(群書類従本)であるが、これは何れも伊勢物語の典據とはなし得ない。何となれば、この二者と古今集とを比較すれば、

13	古	今	集	敏行朝臣集	敏行集
	なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとに、よみてつかはしける。	業平の朝臣の家に侍りける女の許につかはしける。	業平の朝臣の家の女に遣		

としゆきの朝臣 つれづれのながめにまさる 涙河袖のみぬれてあふよし もなし	つれづれのながめにまさる 涙川袖のみぬれてあふよし もなし(群)	し。 徒然の詠めにまさる涙がは 袖のみひちて逢山もなし 返し をんな 淺み社袖はひづらめ涙川身 さへ流ると聞かば頼まむ(歌)
かの女にかはりて、返しに よめる。 なりひらの朝臣 あさみこそ袖はひづらめ涙 河身さへながるときかばた のまん(貞)		

の如く、伊勢物語は、古今集及び古今集の材料たる業平集より取材したことが明白であるからである。

最後に伊勢集との關係に就いては、清輔本古今集に、
在伊勢集。さつきまつはなたちばなのかをかげばむかしの人のそでのかぞ
する
とあり、又袋草紙に、

伊勢集、伊勢物語有一首。

大淀の松はつらくもあらくにうらみてのみもかへる浪哉

と記されてゐる。而して現存伊勢集も亦右の二首を有してゐるが「さつきまつ」の歌は古今集に「讀人不知」として掲げる所であつて、伊勢物語もやはり古今集に材を取り來つたものと想像される。「大淀」の歌に至つては、勢語が伊勢集より選擇したか、或は反對に伊勢集が勢語によつて増補したか、容易に判別し難い。

以上、伊勢物語の原據として私家集を豫想するならば、如何なるものがそれに該當するかについて考察して來た。然し、結論として我々の得たものは、その一二を除いて大部分の現存私家集は勢語の典據となし得ないといふことである。一見交渉ある如く考へられるものも、必ず古今集を通してのものであつて、直接的のものではない。従つて、伊勢物語の素材となり典據とされた私家集は幾多あつたにしても、その多くは、夙に散逸して今傳はらないと言ふことが出来るであらう。

第七項 古 歌

伊勢物語第八十七段に「むかしのうたに あしのやのなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさゝすきにけりとよみけるそのさとをよみける」(天福本)といふ一節がある。この歌が萬葉集卷三の「然之海人者軍布苜鹽燒無暇髮梳乃小櫛取毛不見久爾」を改作したものか、或は別に古歌として遊離して存在せる歌を引用したもののか、勿論明かではないが、なほ後者の事情により一層の妥當性を認め得る。かくの如く、我々は今明確にどれと指摘することは出来ないが、やはり當時古歌として愛誦された幾多のものが、勢語の中に攝取されてゐるに相違ないと考へるのである。今一例として「かしがましきさばにかゝるむしのねやわれだに物をいはでこそ思へ」といふ一首をとつて考證してみよう。

嘗て國語國文の研究所載「宇津保物語の作者及年代」なる論文に於て、金原亮一氏は蜻蛉日記天祿三年八月の條の、

朔日の雨降り降らず時雨だちたるに、未の時ばかりに晴れて、つく／＼ぼうし
いとかしがましきまで啼くを聞くにも、我だにものはといはる。いかなるに
かあらむ、あやしうも心細うも涙浮ぶなり云々。

の「我だにもものは」の句が、宇津保物語、藤原君卷の、

かしがまし草葉にかかる蟲のねよ我だに物をいはでこそ思へ

に依るものであらうとして、宇津保は天祿三年頃にはたしかに世に行はれて居たと断定されたのであるが、此説に對して、宮田和一郎氏は、岩波講座日本文學宇津保物語に於て、新撰朗詠集に、

かしがまし野もせにすだく蟲のねに我だに物を言はでこそ思へ

なる歌が存し、且薩摩守がこの歌を口吟んだことが今物語・古今著聞集・平家物語に見える點よりして、新撰朗詠のは宇津保から取つたのであるか、又古歌のあつたのを宇津保と新撰朗詠と兩方に取つたのであるかが考へられねばならぬ」と言ひ、又「思ふに、引歌ありと思はれる場合、それらしきものうち、何れが眞の引歌であるかを決することは、極めて顯著なる場合の外は即斷しがたいものである。まして宇津保の場合、あの大作のうち、に只一首、殊に甚だ漠然たるものを捕へ來つて、それを根據として時代を推定するが如きは、最も危険なる事といはねばならぬ」と批判して居られる。而して宮田氏の所説は大體に於て肯定されるところであるが、右の

歌が伊勢物語の異本にも存することには、未だ氣付かれなかつた様に思はれるから、少し横道にそれるが、ここに一應愚考を述べて置かう。

「かしがまし」の歌を考察の對象とする時には、前記蜻蛉日記・宇津保物語・今物語・古今著聞集・平家物語以外に、狭衣(後述)並に伊勢物語の異本、神宮文庫本に存する、

かしかましのもせにすだくむしのねや我だに物はいはてこそおもへ
と、小式部内侍本に存する、

かしかましくさはにかゝるむしのねやわれたに物をいはてこそ思へ

とを考慮に入れなければならぬ。そこで先づこれらの資料即ち伊勢物語・蜻蛉日記・宇津保物語・新撰朗詠集等の相關々係について考へる。

第一に伊勢物語と新撰朗詠集との關係であるが、後者に存する前者の歌は、

暮春

ぬれつゝ、ぞしひて折つる年の内に春は幾日もあらしと思へば 業平

三月盡

惜しめども春の限りのけふの日の夕暮にさへなりにけるかな 躬恒

蟲

かしがましのもせにすだく蟲の音や我だにものをいはでこそおもへ

松

すみよしの岸の姫松人ならば幾世か經しとはましものを 業平

の四首、その中後の二首は何れも伊勢物語神宮文庫本(かしがましの歌詞も一致する)と小式部内侍本とのみに存する歌である。而して「惜しめども」の作者を躬恒としてゐるのは、何によつたものか不明であるが、すみよしのを業平としてゐるのは伊勢物語の異本に據つたものと解釋せざるを得ない。何となれば、此の歌は古今集に於ては、讀人不知とされてゐるからである。

要するに新撰朗詠集の前記四首は、伊勢物語殊に神宮文庫本の系統に屬する本又はこれに近き本より取られたことと推定され、従つて宇津保の成立年時を「かしがまし」の歌によつて規定しようとする場合には、新撰朗詠集は問題の圏外に置かれて然るべきである。

第二に伊勢物語の異本と蜻蛉日記との關係を見るに、伊勢物語のそれが蜻蛉日

記に依ると考へられざるは勿論、蜻蛉日記が伊勢物語の異本より取つたと解し得るか否かも疑問である。それは「かしがまし」の歌の伊勢物語に混入せる時代を、天祿三年以前と決定することには、未だ確實な根據が見出されないからである。

第三に伊勢物語異本と宇津保物語との相互關係を見るに、「かしがまし」の歌以外に、兩者の間に一首そのままの直接的引用例を認めることは出来ない。然らばたとひ伊勢物語異本特に小式部内侍本の歌詞と宇津保物語のそれとが一致するとしても、かかるわづか一首の存在によつて、兩者に直接引用關係ありと斷定することは、甚だ危険であると言はねばならぬ。

第四に蜻蛉日記と宇津保物語との交渉については、大體宮田氏の所説が最も穩當なものとして肯定されるであらう。

かく「かしがまし」の歌一首をめぐつて、伊勢物語異本と蜻蛉日記と宇津保物語との三者の間に、何等の直接的關係を認めることか出来ないとするれば、理論上當時かかる古歌が別に存在し、しかもそれ自身非常に有名なものであつて、三者何れもそれを引用したものであると推定せられざるを得ないであらう。

第八項 傳 説

勢語一篇の中に、素材を傳説——業平傳説であれ、又他のものであれ——に求めたものの存することは、既に先學の指摘せる所である。例へば日本文學講座伊勢物語研究に於ける窪田空穂氏の説、國語と國文學昭和五年一月號に掲載された高崎正秀氏の論文などがそれである。窪田空穂氏は業平傳説に取材したものと、第六段第六十五段第六十九段を擧げて居られる。高崎正秀氏は現存伊勢物語を以て在五中將物語業平家集と有宇中將物語伊勢紀伊を主とした伊勢の物語と近江を主とした近江縣の物語とに分れるとの二重奏と解し、近江縣の物語としては鍋冠祭の話(第二百十段)、さ蓆に衣片敷く橋姫の話(第六十三段)、蘆屋の里の話(第八十七段)等を考へて居られるやうである。右の如く兩氏の所論は取材の範圍に於て幾分廣狹の別を見るにしても、勢語の各段の中には材を傳説に仰いだものの存在することを認める點に於ては一致する。然し現存の資料よりして、傳説を素材とした章段を一々指摘するのはきはめて困難なことである。例へば天福本第二十三

段の

むかしゐなかわたらひしける人の子とも井のもとにいてて、あそひけるを
となになりにつればおとこも女もはちかはしてありけれとおとこはこの女
をこそえめとおもふ女はこのおとこをとおもひつゝ、おやのあはすれともき
かてなんありけるさてこのとなりのおとこのもともよりかくなん

つゝ、ゐつのゐつゝ、にかけしまろかたけすきにけらしなみさるまに女
返し

くらへこしふりわけかみもかたすきぬきみならずしてたれかあくへきな
といひくつてつゝにほいのことくあひにけりさて年ころふるほとに女おや
なくたよりなくなるまゝにもろともにいふかひなくてあらんやはとてかう
ちのくにたかやすのこほりにいきかよふ所いてきにけりさりけれとこのも
との女あしとおもへるけしきもなくていたしやりければおとこ、と心あり
てかゝるにやあらむと思ひうたかひてせんさいの中にかくれゐてかうちへ
いぬるかほにてみればこの女いとうけさうしてうちなかめて

風ふけはおきつしら浪たつた山夜はにや君かひとりこゆらんとよみけるをきゝてかきりなくなしと思ひて河内へもいかすなりにけりまれ／＼かのたかやすにきてみればはしめこそ心にくもつくりけれいまはうちとけてつからいるかひとりてけこのうつわ物にもりけるをみて心うかりていかすなりにけりさりければかの女やまとの方をみやりて

君かあたりみつゝをゝらんいこま山くもなかくしそ雨はふるともといひてみいたすにからうしてやまと人こむといへりよろこひてまつにたひ／＼すきぬれは

君こむといひし夜ことにすきぬれはたのまぬ物のこひつゝそふるといひけれとおとこすますなりにけり

なる説話の如きは古今集第十八

風ふけばおきつ白波たつた山夜半にや君がひとりこゆらん

の左註に、

ある人このうたは昔やまとのくになりける人のむすめにある人すみわたり

けり。この女おやもなくなりて家もわろくなりゆくあひだに、このをとこかふちのくに、人をあひしりてかよひつゝ、かれやうにのみなりゆきけり。

さりけれどもつらげなるけしきもみえで、かふちへいくごとに、をとこの心のごとくにしつゝ、いだしやりければ、あやしと思ひて、もしなきまにこと心もあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜、かふちへいくまねにて、せんざいのなかにかくれて見ければ、夜ふくるまでことをかきならしつゝ、うちなげきて、この歌をよみてねにければ、これをきゝて、それより又ほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる。

とあり、大和物語(三條西伯爵家藏傳爲氏筆本による)にも、

むかしやまとのくにかつらぎのこほりにすむおとこ女ありけり。この女かをかたちいときよらなり。としごろおもひかはしてすむ、この女、いとわろくなりければ、おもひわづらひて、かぎりなくおもひながらめをまうけてけり。このいまのめはとみたる女になんありける。ことにおもはねど、いけばいみじくいたはり、身のさうぞくもいときはらかにせさせけり。かくにぎ／＼し

きところにならひてきたれば、この女いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらにねたげにもみえずなどあれば、いとあはれとおもひけり。こゝろにはかぎりなくねたくこゝろうしとおもふを、しのぶるになんありける。とゞまりなんとおもふよも、なをいねといひければ、わがかくありきするをねたまでことわざするにやあらん、さるわざせずば、うらむることもありなんなど、こゝろのうちにおもひけり。さていでていくとみえて、せむぎいのなかにかくれてゐて、おとこやくるとみれば、はしにいでて月のいとおもしろきにかしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまでねず、いといたうなげきてながめければ、人まつなむめりとみるに、つかふひとのまへなりけるにいひける。

かせふけばをきつしらなみたつたやまよはにもきみがひとりこゆらんとよみければ、わがうへをおもふなりけりとおもふに、いとかなしくなりぬ。このいまのめのいへはたつたやまこえてゆく道になんありける。かくてなをみりければ、この女うちなきてふして、かなまりにみづをいれて、むねになんすえたりける。あやしいかにするにかあらんとてなをみる。さればこの

みづ、あつゆにたざりぬれば、ゆふてつ。またみづをいる。みるにいとかなしくて、はしりいでて、いかなる心ちし給へば、かくはしたまふぞととひて、かきいだきてなんねにけり。かくてほかへもさらにかでつといたりけり。かくて月日をおほくへておもひやるやう、つれなきかほなれど、女のおもふことはいといみじきことなりけるを、かくいかぬをいかにおもふらむとおもひいて、ありし女のがりいきたりけり。ひさしくいかざりければ、つゝましくてたてりけり。さていまのめは、われにはよくみえしかど、いとあやしきさまなるきぬをきて、おほくしをつらぐしにさしかけてをり、手づからいひもりをりけり。いみじと思ひてきにけるまゝ、にいかすなりにけり。このおとこはおほきみなりけり。

と見えて居る。これ等の諸本に見える説話の形式は、必ずしも全然同一ではなく、伊勢物語はその材料を業平家集に求めたものではなく、古今集より採録したものでなく、むしろ當時傳唱された所の傳説の中に取材したものと推定されるのである。これ等の諸書に於ける説話の形の相互に異なる理由は、もとより編者の創意

修飾にもよるであらうが、それよりも原據となつたものが、ある一定の典籍ではなく、むしろ傳唱の説話であり、その説話が流動性をもつて傳へられてをり、異なる態度をもつて諸書に採用されたからであらうと思はれる。かくの如く伊勢物語中には、その材を傳説に取るものが少くないであらうが、しかし、そのいづれが確かにさうであるかは、なほ精密なる考證を必要とするであらう。

第四節 編纂の態度

伊勢物語が單なる業平家集の延長増補といふだけでなく、業平家集以外に萬葉集古今集及び當時存在せる歌集傳説等にも取材して戀愛贈答歌の模範集、趣味と實益とを兼ねた歌物語としての意圖を以て編纂されたと解するならば、編者は如何なる態度に於てこれ等の素材を取扱つたのであらうか。

第一項 歌詞の改變

先づ伊勢物語天福本をとつて萬葉集と三代集中に見える歌の統計を示すと次のやうになる。

萬葉集 十二首

卷二(相聞・挽歌)一首 卷三(雜歌・譬喻歌・挽歌)一首 卷四(相聞)三首 卷十一(古今

相聞往來歌類上(三首) 卷十二(古今相聞往來歌類下)三首 卷十四(東歌)一首
古今集 六十二首

卷一(春歌上)四首 卷二(春歌下)一首 卷三(夏歌)二首 卷五(秋歌下)二首 卷七
(賀歌)一首 卷九(羈旅歌)四首 卷十(物名)一首 卷十一(戀歌一)五首 卷十三(戀
歌三)十首 卷十四(戀歌四)九首 卷十五(戀歌五)四首 卷十六(哀傷歌)二首 卷
十七(雜歌上)十首 卷十八(雜歌下)六首 卷二十(大歌所御歌・東歌)一首
後撰集 十一首

卷三(春歌下)一首 卷五(秋歌上)一首 卷九(戀歌一)一首 卷十一(戀歌三)二首
卷十五(雜歌一)二首 卷十七(雜歌三)二首 卷十九(離別羈旅歌)二首

拾遺集 六首

卷八(雜上)一首 卷十四(戀四)二首 卷十五(戀五)一首 卷十九(雜戀)二首

これによつて、萬葉集並に勅撰集の如何なる卷々の歌が、如何に伊勢物語に配置さ
れてゐるかが分る。今これ等の中戀の歌の百分比を求めると、萬葉集は總歌數十
二首中戀歌十首で八十三%、古今集は六十二首中二十八首で四十五%、後撰集は十

一首中四首で三十六%、拾遺集は六首中五首で八十三%といふ割合となる。かく
統計の結果によれば、伊勢物語の編纂者が萬葉集古今集其他に取材する際には、相
聞即ち戀愛歌にその重點を置いたことが看取されるのである。

次に如何なる作者の歌が、如何なる比率をもつて採用されてゐるかについて調
べて見る。伊勢物語に於ては、作者の名前が明記されてゐないから、かりに萬葉集
と三代集に、作者の名の明瞭に見えてゐるもののみを列記しよう。

萬葉集 十二首

倭太后一首 湯原王一首 山口女王一首 石川少郎一首 紀女郎一首 讀

人不明七首

古今集 六十二首

在原業平三十首 小野小町二首 源融一首 紀有常一首 紀茂行一首 藤

原敏行一首 伊登内親王一首 藤原直子一首 紀有常女一首 讀人不知二

十三首

後撰集

在原業平四首 在原行平一首 在原元方一首 上野峯雄一首 讀人不知四首

拾遺集 六首(但萬葉集卷十一と三首重複)

在原業平一首 橘忠幹一首 人麿一首 坂上郎女一首 讀人不知一首

以上八十八首の中、作者業平と認定される歌は三十五首で、これが比率を算出すれば、四十%弱となる。

古今和歌六帖は撰歌の重出多き點に於て、作者名の記載方法に於て、幾多の疑義を存するが、勢語の歌六十九首を有し、且作者名を註するものが多い所から、これをもつて伊勢物語の歌の作者別比率測定の一助となすことも、強ち不可能ではないと信ずる。左に六十九首の作者別表を示せば、

在原業平二十二首 柿本人麿一首 在原行平一首 藤原敏行一首 紀友則一首 山口女王一首 かく山の花子一首 紀女郎一首 齋宮一首 小野小町一首 伊勢二首 讀人不知三十六首

右の如き結果より百分比を算定すれば、業平の歌は三十二%強となり、前掲の四十

%弱とは若干の隔を見るが、これは六帖の作者名を註するに忠實でないため、比較的讀人不明の歌が多くなつてゐるからであらう。

かく伊勢物語二百九首中の一部分即ち萬葉集並に三代集に見える歌八十八首に於て四十%、古今六帖にも存する六十九首に於て三十二%の比率を有する業平の歌は、少くとも一篇の半以上を占めると推定しても不都合ではない。従つて物語編纂の態度の中に、業平の歌を蒐集しようとする意圖の動いてゐたことを斷言しても、決して不當ではないと信ずる。

次に萬葉集古今集と伊勢物語との間に、直接の交渉、即ち前者が後者の典據たる關係が是認されるならば、引抄した歌の歌詞が原典のまま襲用されてゐるか、或は修正されてゐるか、若し改訂されてゐる場合には、どの程度まで編纂者の主觀や、意圖が、そこに窺はれるかを、問題としなければならぬ。

先づ萬葉集の歌詞をそのまま繼承した例は、

君かあたりみつゝを、らんいこま山くもなかくしそ雨はふるとも

君之當見乍母將居伊駒山雲莫蒙雨者雖零(卷十二)

いはねふみかさなる山にあらねともあはぬ日おほくこひわたる哉

石根踏重成山雖不有不相日數戀度鴨(卷十一)

の二首のみである。この二首を認めたのは前者の「見乍母將居」を西本願寺本は「ミツ、オ、ラム」細井本温故堂本は「ミツ、ヲオラム」と讀んで居り、後者に於ては、現時の訓によれば相當異同も存するが「重成山」は嘉曆傳承本類聚古集古葉略類聚鈔に「カサナルヤマニ」とあり「雖不有」日數も「アラネドモ」日オホク」と讀み得ることを考慮すれば、これ等は古點又はそれ以前の訓點をそのまま移したのかも知れないと思はれるからである。然しこれ以外に於ては、萬葉集の歌詞そのままを移したとは、斷じて認めることが出来ないものである。その例證は左に掲げる數首よりしても看取される。

中／＼に戀にしなすはくはこにそなるへかりけるたまのをはかり(第十四段)

中中二人跡不在者桑子爾毛成益物乎玉之緒許(卷十二)

谷せはみ峯まてはへる玉かつらたえむと人にわかおもはなくに(第三十六段)

多爾世婆美彌年爾波比多流多麻可豆良多延武能己許呂和我母波奈久爾(卷十

四)

ふたりしてむすひしひもをひとりしてあひみるまてはとかしとそ思(第三十

七段)

二爲而結之紐乎一爲而吾者解不見直相及者(卷十二)

殊に、

人はいさ思ひやすらん玉かつらおもかけにのみいと、みえつ、(第二十一段)

人者縦念息登母玉蕩影爾所見乍不所忘鴨(卷二)

あしのやのなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさ、すきにけり(第八

十七段)

然之海人者軍布苜鹽燒無暇髮梳乃少櫛取毛不見久爾(卷三)

の二首に至つては修正と稱するよりも、寧ろ改作と認むべきものであるかも知れない。

以上を綜合して考へると、伊勢物語が萬葉集より抄出する際には、古點或はそれ以前と推定される訓法によつて、そのまま襲用したかと推測される如き例も絶無

とは言へないが、しかし大部分はその歌詞にかなりの修正を加へたものである。而してかく修正せざるを得なかつた理由は、時代の推移が齎した歌風格調の變遷と、編者の構成しようとする説話に適應させなければならぬ特殊な事情の二點にあつたと思はれる。萬葉調より古今調に、古今集的と稱するよりも寧ろ伊勢物語的に従つて拾遺集古今和歌六帖等に拾録されたものよりも、遙かに自由に、大膽に修正され、改作されてゐることを知るのである。

この問題に關聯して想起しなければならぬものは、古今集に見える萬葉集の歌である。古今集序の記載によれば、萬えふしふにいらぬふるきうたを選出することを目標としながら、故意か偶然か、現存本には十數首を收めてゐる。それ等の歌が原作そのままであるか、又は修正され、改作されてゐるかは、萬葉集と伊勢物語との關係の究明に或る示唆を與へるに相違ない。仍て今萬葉集寛永板本と古今集清輔本とを比較するに、そこに三つの異つた場合の存することを知るのである。第一は古今集が萬葉集の歌詞をそのまま襲用せる場合で、これに該當するものは左の二首である。

さよ中とよはふけぬらしかりがねのきこゆるそらにつきわたるみゆ(秋歌上)

佐宵中等夜者深去良斯鴈音所聞空月渡見(卷九)

つきぐさにころもはすらむあさ露にぬれてのいろはうつろひぬとも(秋上)

月草爾衣者將摺朝露爾所沾而後者徒去友(卷七)

右の「つきぐさ」なる歌は古今集清輔本筋切等は「いろ」とあるが、其他は何れも「ち」となつてゐて、萬葉集と相違しないからここに擧げたのである。

第二は歌詞の中に僅かな異同を認め得る場合で、例へば、

しはつやまうちいでてみればかさゆひのしまこぎかくるたなゝしをぶね(大

歌所御歌)

四極山打越見者笠縫之鳥榜隱棚無小舟(卷三)

イヌカミヤトコノヤマナルイサラガハイサトコタヘヨワガナモラスナ(戀五)

狗上之鳥籠山爾有不知也河不知二五寸許須余名告奈(卷十一)

の如きがそれである。

第三は一句又は二句にも互る相違の存する場合であつて、即ち、

するがなるたごのうらなみたゝぬひはあれどもきみおこひぬひぞなき戀一)
 可良等麻里能許乃宇良奈美多多奴日者安禮杼母伊敞爾古非奴日者奈之(卷十
 五)

よしのかはいはきりとほしゆく水のおとにもたてじこひはしぬとも戀一)
 高山之石本瀧千逝水之音爾者不立戀而雖死(卷十一)

かくの如き種々の例を綜合して考へると、右の差異を生ずるに至つた原因として、(一)古今集の編者が萬葉集の歌を修正、改作して採録した爲か、(二)萬葉集より直接選擇したものでなく、ある古歌が何人かによつて修正され、改作されて傳へられてゐたのを採録した爲か、その二つを擧げることが出来る。若し古今集序の記述をそのまま認容するとすれば、第一の場合には當然否定されねばならぬ。さすれば第二の場合が支持されるであらうが、若し支持されるとすれば、伊勢物語中に存する十二首の歌も、萬葉集より直接選擇されたものでなく、萬葉の歌が修正され、改作され、古歌として存在したものであつたかも知れない。然し我々は、かかる媒介物としての古歌集を想像し得るにしても、現在それと指定出来るものを有してゐ

ない。従つて今は單なる臆測を下すよりも、寧ろ假に萬葉集と伊勢物語とを直接結びつけて解釋する立場を取つておき、他日の研究を俟つ事にしたいと思ふ。

次に古今集の貞應本と、伊勢物語の天福本とを取つて、その何れにも存する六十二首を比較すれば、歌詞に相違のある歌は十一首に過ぎない。その中差異の僅少なるものを對照して考へるに、

みちのくの忍もちすりたれゆへにみたれそめにし我ならなくに(第一段)

みちのくのしのぶもちすりたれゆゑにみだれむと思ふわれならなくに(卷十

四)

「みたれそめにし」は大島本、朱雀院塗籠本何れも「みたれそめけん」、清輔本古今集の引用には「ミタレムト思」とあり、「みだれむと思ふ」は元永本に「みだれそめにし」となつてゐる。

むさしのはけふはなやきそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり(第十
 二段)

かすが野はけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり(卷一)

あま・くも・のよ・そに・のみしてふることばわかある山の風はやみ也(第十九段)
ゆきかへり空にのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり(卷十五)

右の「あまくものよそに」を朱雀院塗籠本は「ゆきかゑりそらに」と記し、清輔本古今集の引用せる勢語も亦「ゆきかへり……」としてゐる。

秋の、にさ、わけしあさの袖よりもあはてぬる夜そひちまさりける(第二十
五段)

秋の、にさ、わけしあさの袖よりもあはてぬる夜そひちまさりける(卷十三)
「ぬる」は傳慈鎮爲家兩筆本に「こし」とある。

わかたのむ君かためにとおる花はときしもわかぬ物にそ有ける(第九十八段)
限りなき君がためにとをる花は時しもわかぬ物にぞありける(卷十七)

我みてもひさしくなりぬ住吉のきしのひめ松いくよへぬらん(第一百十七段)
我みてもひさしくなりぬすみのえの岸の姫松いくよへぬらむ(卷十七)

「すみのえの」は清輔本元永本何れも「住吉の」としてゐる。
野とならばうつらとなりてなきをらんかりにたにやは君はこざらむ(第一百二

十三段)

野とならばうつらとなりてなきで年はへむかりにだにやは君はこざらん(卷十八)
「なきて年はへむ」元永本には「なりてなきをらむ」とする。

以上比較の結果よりすれば、この七首の中、勢語と古今兩者の間に、判然と歌詞の根本的相違を認め得る場合は僅かに二首に過ぎず、他の五首の有する小異は、傳本の相違によつて、自ら解消する性質のものである。

次に二句以上の差異を有する歌を比較すると、

くりはらのあれはの松の人ならばみやこのつとにいさといはましを(第十四
段)

をぐろざきみつこのじまの人ならば宮このつとにいざといはましを(卷二十)

わする覽と思心のうたかひにありしよりけに物そかなしき(第二十一段)

わすれなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ戀しき(卷十四)

「まづぞ戀しき」を元永本は「ものぞかなしき」とし、清輔本は「まづぞかなしき」とする。

思ふにはしのふることそまげにけるあふにしかへはさもあらはあれ(第六十

清輔本

五段)

おもふにはしのぶることぞまけにける色にはいでじと思ひしものを(卷十一)勢語の歌の下句は友則の「いのちはやなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに(卷十二)」と関係ありと稱せられてゐることを注意しなければならぬ。

さむしろに衣かたしきこよひもやこひしき人にあはてのみねむ(第六十三段)
さむしろに衣かたしきこよひもや我を松覽宇治の橋姫(卷十四)

この四首に於ては、勢語と古今とは隔然と區別される。前者の歌は、確かに物語組織の意圖の下に、後者のそれに修正を加へたものに相違ない。

以上を總括すれば、萬葉集より抄出せる歌十二首に、一句の修正を施せるもの二首、比率十七%弱、二句以上に互る修正を加へたるもの八首、比率六十七%弱であるに對し、古今集より拾録せる歌六十二首假に業平集より直接採れるものも含めて、一句のみ修正せるもの二首、その比率三%強、二句以上修正せるもの四首、比率六%強の割合となる。これに依つて、萬葉の歌に對しては、その大部分に手を加へて

ゐるが、古今集のそれに對しては、大部分そのまま襲用してゐることが了解されるであらう。

第二項

詞書の改變

次に、伊勢物語に於ては、詞書は如何に取扱はれてゐるかといふ問題を考へて見よう。

詞書とは歌がいかなる場合に詠まれたかといふことの説明である。而して平安朝の歌人は、この詞書なるものを極めて重要なものと考へてゐる。その理由について、窪田空穂氏は日本文學講座伊勢物語研究に於て下の如く説明して居られる。即ち氏は、

「平安朝の歌は勿論實際に即したものだ。しかし事象はいはうとせず、主として事象の持つ氣分の方だけをいつたものとするれば、その歌を十分に理解しようとするには、その歌を詠んだ場合を知る必要がある。即ち端詞は無くてもならないものである。平安朝期の歌人の端詞を重んじた理由の一つはここ

にある。」

「感を誘ふ事象はさまざまである。複雑である。しかし一旦感となれば、感は一單純である。單純な感ではあるが、その單純は複雑を含んだ、又は複雑を暗示したものでありたい。それでなければ、嬉しいといひ悲しいといつてもその程度が分らない。これを誤解なく他に傳へようとするれば、端詞を添へるより外はない。平安朝の歌人の端詞を重んじた一つの理由はここにある。」

「以上は、我が思ひをやる場合の歌である。即ち必ずしも讀者を豫想しない場合の歌についてである。當時の歌人はさうした歌よりむしろ贈答の歌を詠む場合の方が多かつた。贈答の歌はいふまでもなく一人の讀者を豫想したものである。相手の一人に感じさせようと思ふだけで、他の人は問題としないものである。即ちその時その場合に適切な詠み方をするものである。もしその歌を他人から見られるとすると、他人の目には或特殊な場合の歌、特殊な條件のもとで詠んだ歌となつて来る。當時の歌人は、それが一人を相手とした贈答の歌でも、これを消息代りとのみは見ず、文藝として他人からも見

られるとすると、その場合を斷つておく必要がある。それでないといふと歌人としてみづから不利な立場に立つからである。平安朝の歌人の端詞を重んじた理由の一つはここにある。」

「贈答の歌は婉曲を旨とする。婉曲は前にもいつたやうに、社交上から見れば尊むべき禮儀であり、文藝上から見れば、なしやすすくない、随つて尊むべき一つの技巧である。もし婉曲を極めた歌を詠みえたならば、作者としては誇りを感じたことであらう。しかし婉曲な歌ほど第三者には誤解されやすい。誤解されればせつかくの誇りも傷つけられる。いい歌ほどくはしい端詞の添つてゐるのはこの故と思はれる。平安朝の歌人の端詞を重んじた理由の一つはここにある。」

以上抄出した四項目を要約すれば、和歌が詞書を必要とする理由は、歌の表現對象が氣分であり、表現内容が複雑であり、表現方法が婉曲であり、且多くの讀者を豫想したことにありと解釋される。

右の如き種々の理由よりして重要視されて來た和歌の詞書は、筋の發展を重要

なものと見る物語に於ては、和歌の場合より以上に重い地位を占める譯である。しからば伊勢物語に於ては、これは如何に取扱はれてゐるか。具體的にいへば、原據と推定される萬葉集業平歌集古今集等の詞書が勢語にそのまま襲用されてゐるか、或は敷衍されてゐるか、又は省略されてゐるかといふことは、編纂態度の問題として、重大であり且興味深いものである。

先づ業平歌集の詞書が、勢語に入つて如何に變化したかを検討する。ここに業平歌集と稱するものは、古今集の材料ともなり、同時に伊勢物語の根幹ともなつたと推定される所の古き形を具へた集であつて、現存の業平集或は在中將集の如き伊勢物語以後の再修に係る集を指すのではない。従つて、かかる古き業平歌集と勢語とを比較して、その詞書の相違變化を考察するといふことは、實際に於て不可能であるが、しかし古今集と伊勢物語によつて、間接的にその一面を推知することが出来ると思ふ。

古今集に採録された業平の歌は、それが時に長い詞書を有する點より、伊勢物語又はその粉本と密接な關係にあるに相違ないといふ推定は、從來幾多の學者によつて試みられて來た。前節典據論に於て幾分觸れて置いたのであるが、この古今集中の業平の歌及び業平と直接贈答せる旨を明記した人々の歌は、悉く伊勢物語に採録されて居り、その詞書を比較すれば、大別して次の三つの場合に歸することが出来る。

一、古今集に簡略であつて伊勢物語に詳密なる場合。例へば、

伊勢物語	103 むかしおとこ有けりいとまめにしちようにてあたなる心なかりけりふか草のみかとなむつかうまつりける心あやまりやしたりけむみこたちのつかひたまひける人をあひいへりけりさて ねぬる夜の夢をはかなみまどろめはいやはかなにもなりまさる哉となんよみてやりけるさるうたのきたなけさよ
古今集	13 人にあひてあしたによみてつかはしける。 なりひらの朝臣 ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

二、古今集に詳密であつて伊勢物語に簡略なる場合。例へば、

<p>48</p> <p>伊勢物語</p> <p>昔おとこ有けりむまのはなむけせんとして 人をまちけるにこさりければ 今そしるくるしき物と人またむさとを はかれすとふへかりけり</p>	<p>18</p> <p>古今集</p> <p>きのとしさだが阿波のすけにまかりける 時にむまのはなむけせむとて、けふと いひおくれりける時に、こゝかしこにま かりありきて、夜ふくるまでみえざりけ ればつかはしける。 なりひらの朝臣 今ぞしるくるしき物と人またむさとをば かれすとふへかりけり</p>
--	--

三、兩者共に繁簡精粗の略一致する場合。

イ、その内容が略同一の場合。例へば、

<p>84</p> <p>伊勢物語</p> <p>むかしおとこ有けり身はいやしなからは</p>	<p>17</p> <p>古今集</p> <p>なりひらの朝臣のはゝのみこ、ながをか</p>
---	--

<p>97</p> <p>伊勢物語</p> <p>ゝなん宮なりけるそのはゝなをかをかといふ 所にすみ給ひけりこは京に宮つかへし ければまうつとしけれとしはゝゝえまう てすひとつこにさへありければいとかな しうし給ひけりさるにしはすはかりにと みのことゝて御ふみありおとろきてみれ はうたあり 老ぬればさらぬわかれのありといへば いよゝゝみまくほしきゝみかなかのこい たうゝちなきてよめる 世中にさらぬわかれのなくも哉千よも といのる人のこのため</p>	<p>7</p> <p>古今集</p> <p>にすみ侍りける時に、なりひら宮づかへ すとて、時々もえまかりとぶらはず侍り ければ、しはすばかりに、はゝのみこのも とより、とみのことゝてふみをもてまう できた。あけてみれば、ことばはなく てありけるうた。 おいぬればさらぬわかれもありといへば いよゝゝみまくほしき君かな 返し 世中にさらぬわかれのなくもがなちよも となげく人のこのため</p>
<p>むかしほり河のおほいまうちきみと申す いまそかりけり四十の賀九條の家にてせ られける日中将なりけるおきな さくら花ちりかひくもれおいらくのこと むといふなるみちまかふかに</p>	<p>ほりかはのおほいまうちきみの、四十賀 九條の家にてしける時によめる。 在原業平朝臣 さくら花ちりかひくもれおいらくのこと むといふなるみちまがふかに</p>

ロ、その内容に若干の差異ある場合。例へば、

伊勢物語	古今集
<p>19 昔おとこ宮つかへしける女の方にこたちなりける人をあひしりたりけるほともなかくかれにけりおなしところなれば女のめにはみゆる物からおとこはある物かとも思たらず女</p> <p>あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめにはみゆる物からとよめりければおとこ返し</p> <p>あまくものよそにのみしてふることはわかふる山の風はやみ也とよめりけるは又おとこある人となんいひける</p>	<p>15 なりひらの朝臣、きのありつねがむすめにすみけるを、うらむることありて、しばしのあひだ、ひるはきてゆふさはかへりのみしければ、よみてつかはしける。</p> <p>あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめにはみゆる物から</p> <p>返し</p> <p>なりひらの朝臣</p> <p>ゆきかへり空にのみしてふることはわかふる山の風はやみなり</p>

等がそれである。

元來古今集は單なる蒐集でなく、撰集であり、しかも勅撰集である。その體裁の

統一といふ點よりすれば、選歌の詞書に對しても、或程度の省略や加筆は、必ず之をなしたと見なければならぬ。而して業平の歌に於て、特に詳細なる詞書を許す場合の多いことは、六歌仙中第一の歌人に推すべき業平に對する尊崇の念によるとはいへ、又即興、贈答の歌の多い彼の作が自らそれを必要としたとはいへ、業平歌集の詞書それ自體が詳細なものであつた點に根本的原因を認むべきであらう。業平歌集の端詞が、古今集のそれより長大なものであつたに相違ないことは、世中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし^の詞書が、古今集に、

なぎさのゐむにてさくらをみてよめる

と簡略に記されてゐるに對し、土佐日記に、

故これたかのみこのおほんともに、故ありはらのなりひらの中將の、世のなかにたえてさくらのさかさらばはるのこゝろはのどけからましといふうたによめるところなりけり。

とあるによつても推知される。勅撰集の性質よりしても、右の例證によつても、古今集に於ては、業平歌集より若干簡潔に記されてゐることは、一般的原則と認めて

いいやうである。

一方伊勢物語に於ては、單なる業平集の集成といふことのみを重點を置くのではなく、一つの筋の展開を主眼とする歌物語として編纂されてゐる。然らば勢語としての性質及び形態上、粉本に相當の修飾の施されるのは當然のことであらう。而してこの場合には、詞書を簡略ならしむることを必要とする場合は少く、むしろ加筆してより詳細ならしめる場合の多いことを、一般の原則と認めるべきである。

かく歌そのものを中心とする歌集と、事件の展開に重きを置く物語との本質的差異より演繹された一般原則が、古今集と伊勢物語とに於て如何に適用されるであらうか。これについては、前掲第一並に第三の場合が、殆ど全部を占めてゐることが注意されねばならない。第二の如き例も稀には存するが、これはむしろ例外と見るべく、決して一般原則を破壊するが如きものではない。

要するに業平歌集の詞書は、伊勢物語に於て極端なる變化を示してゐるのではなく、大體古今集に於て簡易化してゐるのと對蹠的に複雑化してゐると言ふことが出来る。これは、窪田空穂氏が日本文學講座伊勢物語研究に於て、

伊勢物語の作者が、業平家集を見たとして、これにいかなる技巧を加へようかと思つたとしたら、彼はそれを飛び離れたものとしようとするよりも、むしろ一方の、殆ど手を加へない程度の加へ方をしようと思つたらうと思はれる。業平家集は、あつたとすれば重んじられてゐたらう。その重んじられてゐたものを改作するとすれば、この方法の方が、技巧として謂はゆる濫い爲方になるからである。それに又飛び離れた方面としては、彼は業平の傳説を捉へて立派な小説としてゐるので、そちらに譲らうと思つたことだらう。

と述べて居られるのと結論を同じくするものである。

次に萬葉集並に古今集の詞書が、勢語に入つて如何なる變化を受けてゐるかを検討しよう。この問題に關しては既に日本文學講座伊勢物語研究にも窪田空穂氏の説が見えてゐるが、氏によれば、

伊勢物語の作者が古今集の歌をとつて小説とする場合、それに端詞が添つてゐないものであると極めて短い、極めて簡単な文句を添へてゐるものが多い。それでないと思ひ切つて長いものを添へてゐる。短い方としては七十九段

の「濡れつつぞしひてをりつる藤の花」の歌のあるもの、長い方としては五十九段の「五月待つ花橘の香をかげば」の歌のあるものなど適例である。この兩極端な法をとつてゐるのは何故であらうか。古今集の歌は、當時としては誰しも知つてゐるものである。それに極めて短い文句を添へることによつて全く別なものとすることは、技巧としては優れたものである。その場合、短いといふことが技巧なのである。反對に長い方は、常人の思ひも寄らないものに變へたことで、この場合は、その飛び離れてゐるといふことが技巧なのである。平安朝は文藝の中心としてゐた歌でさへも、技巧そのものとした時代である。まして散文の世界で、いはゆる凝つた技巧を弄することは、むしろ自然なことであつたらう。

といふのである。

思ふに伊勢物語がその材を萬葉集並に古今集に取れる態度について論及するにあつては、先づ伊勢物語が二部分より構成されてゐるといふ説の存在することに注意の眼を注がなければならぬ。その一は日本文學論纂伊勢物語新考に

於ける品田太吉氏の説である。氏の説は、

伊勢物語とは伊勢が作りたる物語といふ意なるべし。但し其文は平凡にして何の感も發らず。業平朝臣の自記とは雲泥の相違あり。もとより別種の物なりしなり。然るに伊勢と戀歌の贈答をなせる枇杷左大臣仲平をなりひらと書誤りし歌往々見ゆ。それと同じ誤りにて、此兩種の文が相混るに至りしならん。

即ち氏によれば勢語一篇は業平自記と伊勢が作れる物語との結合して成立したものと見るのである。その二は國語と國文學第六十九號に發表された高崎正秀氏の見解で、氏の説く所によれば、

私かに思ふに、現存伊勢は二つの異なる分子——謂はゞ「有宇中將の物語」と「在五中將物語」と云つた様なもの、二重奏ではないだらうか。有宇中將物語は委しく云へば、之を伊勢紀伊を主とする伊勢の物語と、近江を主とする近江縣の物語とに分けらるべきであらうが、二者は凡そ同源に發して、しかく矢筈しい區別はなかつたかも知れぬ。其に業平の家集——在五中將物語、即在五が

日記といふ自敘傳風のものが重ね合されて、そこに「原本伊勢物語」とでも命名すべきものが成立し、次々別人別様の色々のものが添削加筆されて、遂に今日見るが如き伊勢物語は出来上つたのではなからうか。

近江縣の物語は又別に小野神の物語——小野の物語と呼んでもよいかも知れぬ。小野神の神人輩の持ち廻つた Ballad や伊勢をの海人らが諸國に撒布したばらつどが、各地に固着し芽生して、永き年代の間には、こゝに大きな一群の説話群を形成したであらう。かうした説話群は、伊勢物語を形づくる前、一度も筆録されなかつたかも知れぬ。さうした説話に親しく關係を有した人が、其餘りにも業平の事蹟に偶合するもの多きに興を發して、こゝに一篇の伊勢物語が結構されたことでもあらうか。而して一旦其が成立されると、諸國の説話群が之を逆輸入して、遂に日光山縁起中に在る宇中將や馬頭御前といふ様な名前も説かれることになるのである。

即ち現存勢語の根幹は在る五中將物語(業平家集)と有る宇中將物語(伊勢の物語と近江の物語)との二重奏によつて形成されてゐるといふのである。

品田氏が伊勢の作りたる物語を假定される論據は、

一、古註の説に伊勢が作りて七條の後に奉るとあること

二、家集の文體に似てゐること

三、家集に數首萬葉集の歌を採つてゐること

等に存するらしい。その中の第一第二は、從來多くの學者によつて否定されてゐる所であり、第三も確實な論據とされ得るかどうか疑問である。何故ならば、氏の數首と稱するものは、恐らく、

わがせこにならしの岡のよぶこ鳥君よびかへせ夜の深ぬまに

山城の岩田のもりのは、そ原みつゝや妹が家ぢゆくらん

岩城の野中のまつをひきむすび命しあらば歸きてみむ

白浪のよする磯まをこぐ舟のかちとるまなくおもほゆる哉

夕闇は道たどくし月待てかへれわがせこそそのまにもみん

等を指すものであらうが、わがせこにの歌の如きは拾遺集卷十三に、

山邊赤人

我せこをならしの岡の喚子鳥君よびかへせ夜の更けぬ時

と見えて居り、これ等の歌が果して最初から伊勢集に存したものでどうか疑問である。むしろこれは後人の増補と見られる可能性の方が多い。従つて、伊勢集にも伊勢物語にも、萬葉集の歌が採録されてゐるからといふ理由より、直ちに勢語の一部が伊勢の筆作に係ることを断定しようとするのは、頗る危険と言はざるを得ない。かく氏の伊勢筆作説には容易に同意されぬものがあるが、とにかく品田高崎兩氏によつて勢語の中に二つの部分の存することが認められたのは、首肯されることと思はれる。

一體勢語一篇の中には歌を中心とする章段と、歌よりもむしろ説話に重點を置く章段との二つの異つた傾向が認められ、後者に於ては特に傳説的色彩が濃厚である。而してかかる二つの傾向の存することは、歌を中心とする歌集より筋又は事件を中心とする物語説話集等への過渡的形態としての歌物語に於ては、當然豫想されるところであらうが、又編者の編纂態度特に萬葉集並に古今集に取材する場合の態度に關聯することの多いのは否めない事實であらう。萬葉集並に古今

集の歌を、勢語に採録するに當つて、編者の取つた方針は、常に詞書を有せざるか、或は有するにしても、極めて簡單なるものであるかの場合に限るといふ方針であつたと思はれる。そしてこれを素材として採録するには、二つの異つた場合が認められる。第一は、先づ物語に採録すべき歌が豫定され、これに簡単な詞書を後から附與して一段を形成する場合である。その中にも例へば、

伊勢物語	73	むかしそこにはありときけとせうそこを たにいふへくもあらぬ女のあたりをおも ひける めにはみてゝにはとられぬ月のうちの かつらのこときゝみにそありける
萬葉集	4	(湯原王贈娘子歌二首) 目二破見而手二破不所取月内之楓如妹乎 奈何責

伊勢物語	98	古今集	17
------	----	-----	----

昔おほきおほいまうちきみときこゆるお

<p>115</p> <p>はしけりつかうまつるおとこなか月許に むめのつくりえたにきしをつけてたてま つるとて わかたのむ君かためにとおる花はとき しもわかぬ物にそ有けるとよみてたてま つりたりければいとかしこくおかしかり 給て使にろくたまへりけり</p>	<p>10</p> <p>限りなき君がためにとをる花は時しもわ かぬ物にぞありける</p>
<p>むかしみちのくにゝておとこ女すみけり おとこ宮こへいなんといふこの女いと なしうてうまのはなむけをたにせむとて おきのゐてみやこしまといふ所にてきけ のませてよめる をきのゐて身をやくよりもかなしきは 宮こしまへのわかれなりけり</p>	<p>おきのゐる みやこしま をのゝこまち おきのゐて身をやくよりもかなしきは宮 こしまへのわかれなりけり</p>

等の如く單に一首だけを取る場合や、或は、

<p>25</p> <p>伊勢物語</p> <p>むかしおとこ有けりあはしともいはさり ける女のさすかなりけるかもとにいひや りける 秋のゝにさゝわけしあきの袖よりもあ はてぬる夜そひちまさりける色このみな る女返し みるめなきわが身をうらとしらねはや かれなてあまのあしたゆくゝる</p>	<p>古今集</p> <p>13</p> <p>なりひらの朝臣 秋のゝにさゝわけしあきの袖よりもあは でこしよぞひちまさりける みるめなきわが身を浦としらねばやかれ なてあまのあしたゆくゝる 小野小町</p>
---	--

右の如く、集に於て何等の關係なき二首が、偶然並列してゐるためにこれを贈答歌と認めて採用する場合や、或は、

<p>14</p> <p>伊勢物語</p> <p>むかしおとこみちのくにゝすゝろにゆき いたりにけりそこなる女京のひとはめつ</p>	<p>萬葉集</p> <p>12</p>
--	----------------------

<p>らかにやおほえけんせちにおもへる心な んありけるさてかの女 中ノに戀にしなすはくはこにそなる へかりけるたまのをはかりうたさへそひ なひたりけるさすかにあはれとやおもひ けんいきてねにけり夜ふかくいてにけれ は女 夜もあけはきつにはめなてくたかけの またきになきてせなをやりつるといへる におとこ京へなんまかるとて くりはらのあれはの松の人ならばみや このつとにいざといはましをといへりけ れはよるこほひておもひけらしとそいひ をりける</p>	<p>中々二人跡不在者桑子爾毛成益物乎玉之 緒許 古今集 20 (みちのくうた) をぐろさきみつのかじまの人ならば宮こ のつとにいざといはましを</p>
---	--

の如く兩集にまたがつて拾録する場合もある。しかし、何れにしても、勢語に於ける詞書は、編者の創作に相違ないと思はれる。

第二は説話の筋が大體豫定されてゐて、これに適合する歌が後から集に求められる場合である。この場合に於ても、一段を構成するに、一首だけ採録する時もあり、又二首以上を採用する時もある。そしてこれ等の歌を同一の集に求めることもあり、場合によつては二つ以上の集にまたがることもある。例へば、

<p>60 伊勢物語 むかしおとこ有けり宮つかへいそかしく 心もまめならさりけるほといへとうし まめにおもはむといふ人につきて人のく にへいにけりこのおとこ字佐の使にてい きけるにあるくにのしその官人のめに なむあるときゝてをんなあるしにかはら けとらせよさらすはのましといひけれは かはらけとりていたしたりけるにきかな ゝりけるたちはなをとりて さ月まつ花たちはなのかをかけはむか しの人のそてのかそするといひけるにそ 思ひいてゝあまになりて山にいりてそあ</p>	<p>古今集 3 さ月まつ花たちばなのかをかけば昔の人 の袖のかぞする 読人しらず</p>
---	---

りける

或は、

伊勢物語	<p>65</p> <p>むかしおほやけおほしてつかうたまふ女の色ゆるされたるありけりおほみやすん所とていますかりけるいとこなりけり殿上にさふらひける在原なりけるおとこのまたいとわかゝりけるをこの女あひしりたりけりおとこ女かたゆるされたりけりは女のある所にきてむかひをりければ女いとかたはなり身もほろひなんかくなせそといひければ</p> <p>思ふにはしのふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれといひてさうしにおりたまへればれいのこのみさう</p>
古今集	<p>11</p> <p>おもふにはしのぶることぞまけにける色にはいでじと思ひしものを</p>

伊勢物語	<p>しには人のみるをもしらてのぼりぬければこの女思ひわひてさとへゆくされはなにのよきことと思ていきかよひければみな人きゝてわらひけりつとめてとのもつかさのみるにくつはとりておくになけいれてのほりぬかくかたはにしつゝありわたるに身もいたつらになりぬへければつゝるにほろひぬへしとてこのおとこいかにせんわかかゝる心やめたまへとほとけ神にも申けれといやまさりにのみおほえつゝ猶わりなくこひしうのみおほえければおむやうしかむなきよひてこひせしといふはらへのくしてなむいきけるはらへけるまゝにいとゝかなしきことかすまさりてありしよりけにこひしくのみおほえければ</p> <p>こひせしとみたらし河にせしみそき神はうけすもなりにけるかなといひてなん</p>
古今集	<p>11</p> <p>戀せじとみたらし河にせしみそき神はうけずぞなりにけらしも</p>

いにけるこのみかとはかほかたちよくお
はしましてほとけの御名を御心にいれて
御こゑはいとたうとくて申たまふをき
て女はいたうなきけりかゝるきみにつか
うまつらてすぐせつたなくかなしきこと
このおとこにほたされてとてなんなきけ
るかゝるほとにみかときこしめしつけて
このおとこをはなかしつかはしてければ
この女のいとこのみやすところ女をはま
かてさせてくらにこめてしおりたまふけ
れはくらにこもりてなく
あまのかるもにすむゝしの我からとね
をこそなかめ世をはうらみしとなきをれ
はこのおとこのくにより夜ことにきつ
ゝふえをいとおもしろくふきてこゑはお
かしてそあはれにうたひけるかゝれば
この女はくらにこもりながらそれにそあ
なるとはきけとあひみるへきにもあらで

15

典侍藤原なほいこの朝臣
あまのかるもにすむゝしの我からとねを
こそなかめ世をばうらみじ

なんありける
さりともと思置こそかなしけれあるに
もあらぬ身をしらすしてとおもひをりお
とこは女しあはねはかくしありきつゝ人
のくにゝありきてかくうたふ
いたづらに行てはきぬる物ゆへにみま
くほしさにいざなはれつゝ水のおの御時
なるへしおほみやすん所もそめとのゝ后
也五條の后とも

13

いたづらにゆきてはきぬる物ゆゑにみま
くほしさにいざなはれつゝ

の如きをその一例として擧げることが出来る。而して編者の藝術的手腕の凡非
凡が最もよく看取されるのは、業平集を脚色し物語化した部分よりも、むしろかか
る部分に於てであると思ふことが出来るであらう。

第三項 説話の配列

現存伊勢物語は何れも初冠の段を巻頭に置き、終焉の段を最後に配する所謂朱

雀院本の系統に屬し、平安朝末に於ける勢語諸本の中でも、最もよく整頓された形態を有してゐた本であつたらしい。しかし、この最も組織的な形態を具備すると推定される朱雀院本も、その各章段が年代順に配列されてゐるかといふと決してさうではない。從來伊勢物語の組織について考察した論文中で最も詳細なものは、越中の學者五十嵐篤好の著伊勢物語披雲に見えるそれであらう。披雲には左に示す如き年表と、編次標目とが記載されて居り、天福本の段序と歌の制作年代との關係を明かにしてゐる。

年表		續後記・文德實錄・三代實錄・大鏡・扶桑略記等		
天皇 年號	惟喬親王	惟仁親王	二條后 子高	業平朝臣
天仁 承和六		清和天皇也		業平朝臣 十五歲
七				元服
八				融朝臣十八才
				雜記

九	十	十一	十二	十三	十四	嘉祥元	仁明天皇崩 二	文德天皇 三	仁壽元	二
御父文德天皇 太子立玉ヲ	生							七歲		
							御母明子二十三歲 三月生	立十一月太子ニ		
生	二歲	三歲	四歲	五歲	六歲	七歲	八歲	九歲	十歲	十一歲
十八歲						是マデ無位	從五位下廿五歲	是ヨリ二三年 間ニ除名セラ	レシナルベシ	東國へ下リ ハ是ヨリ二三
阿保親王薨						崇子内親王薨 十九歲				

五	四	三	二	貞觀元	清文德天皇崩二	天安元	齊衡元	三
彈正尹					十月大宰帥	元服四品	十三歲	
					御即位十一月			
				十歲	御母明子中宮	九歲		
廿二歲	廿一歲	廿歲	宮仕ニ出玉フナルベシ	從五位上	五節舞姫	十七歲	十六歲	十五歲
左兵衛權佐	從五位上	三十七歲		正六位上ハコ	ベシ	高子ニモノ申	タリシハ此一	年ノ間ナルベ
						女御多賀幾子卒		
						二月廿五日五條后		
						大原野詣高子車		
						ノ後ニ乗ル		
						九月伊豆内親王薨		

十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六
益封百戶		二月上野太守 七月出家	廿八歲							常陸守
						十九歲				元服十五歲
卅三歲	卅二歲	卅一歲		廿九歲	廿八歲	廿七歲	廿六歲	廿五歲	廿四歲	廿三歲
	從四位下	四十八歲			正五位下	四十四歲			右馬頭	左近衛權少將
		融朝臣左大臣 基經朝臣右大臣	五條后崩	融朝臣大納言 基經朝臣大納言 三十六歲	二月貞明親王太子立	十二月貞明親王 生陽成天皇子				

仁 和 元	同 月 五 十 四 歲 光 孝 天 皇 八	二 月 遜 位 十 七 歲 七	帝 加 元 服 六	五	清 和 天 皇 崩 四	三	二	陽 成 元 慶 元 天 皇	正 月 十 八	十 一 月 讓 位 十 七	十七
								卅四歲			
			御 母 太 皇 太 后		卅一歲					廿七歲	
			皇 太 后	四 十 歲	卅九歲	卅八歲	卅七歲	中 宮	卅五歲	卅四歲	
				卒 五 十 六 歲	美 濃 權 守		相 模 守	從 四 位 上	五 十 二 歲	右 近 衛 權 中 將	
	太 政 大 臣 職 掌 有 無 勘 奏				基 經 朝 臣 太 政 大 臣 四 十 六 歲				瀨 朝 臣 今 年 マ デ 社 元 慶 八 年 不 出 門	貞 數 親 王 生	

七一八

ト
1506
續

廿九段	二條後の花賀
自三十段 至卅七段	女誰ともしられず。
卅八段	有常かりいきたる
卅九段	崇子内親王うせ給ひし葬送を見る
四十段	女誰ともしられず
四十一段	妻の妹夫の衣をはりやりたり
四十二段	女誰ともしられず
四十三段	賀陽親王のつかひ給ひける女にものいふ
四十四段	親族のものあかたへゆく馬のはなむけす
四十五段	あはぬ女のうせし忌にこもりてゆく螢のうたをよむ
四十八段	善友の他國へいきたるより文おこせたり

四十七段	女たれともしられず
四十八段	紀利貞の馬のはなむけなる事古今集にてしらる
四十九段	妹のをかしけなるを見をりてうたよむ
自五十七段 至五十七段	女たれともしられず
五十八段	長岡に家作りてあり
五十九段	東山住まむと思ひ入りて住わびぬのうたをよむ
自六十二段 至六十二段	宇佐の使にて筑紫までいきたり此中に橋のうたあり
自六十三段 至六十四段	女誰ともしられず此中つくも愛の女の所に在五中將といへり
六十五段	二條後の事をいへり放縦而不拘さまをかたる
自六十六段 至六十六段	兄弟友たちかきつらねて難波いづみ道遙しあるく
自六十九段 至七十九段	伊勢國へ狩の使にいきたるよりかへるまで

自七十三段 至七十五段	女たれともしられず
七十六段	二條后大原野詣
七十七段	女御多賀幾子うせ給ひて四十九日の御わざ安祥寺にてし給ふに
七十八段	山しなの禪師のみこを大將常行とひ奉る
七十九段	貞數親王生れ給ふ行平朝臣の女のはら也
八十段	藤の花を折りて人に奉る
八十一段	川原院にて鹽かまのうたをよむ
自八十二段 至八十三段	惟喬親王の御供にて水無瀬にゆきたり小野の宮をとふらひ奉るまで
八十四段	伊豆内親王より文おこせ給ふ
八十五段	むつき小野の宮をとひ奉る
八十六段	女誰ともしられず

八十七段	津國苜屋の里に住みけるを行平朝臣とひて布引の瀧を見にゆく
八十八段	老ゆくを歎きて大かたは月をもめでじのうたをよむ
八十九段	われよりまさりたる人をおもふ
自九十三段 至九十三段	女たれともしられず
九十四段	女は良相公の女なるべし秋のよは春日わするゝのうた
九十五段	二條后につかうまつる女にもいふ
九十六段	女誰ともしられず男天のさかてを打てのろふ
九十七段	基經朝臣の四十の賀
九十八段	良房朝臣へ梅花の作り枝に雉子をつけて奉る
九十九段	右近馬場のひをりの日
百段	後涼殿のはさまをわたりけるに忘草を出したる所

百一段	行平朝臣の家に藤原良近來るあやしき藤の花あり
百二段	親族なるものゝ尼に成りて在るかたへそむくとてのうたをやる
百三段	仁明天皇の御子たちのつかひ給ふ女にものいふ
自百四段 至百五段	女誰ともしられず
百六段	立田川にてからくれなるに水くゝるとはのうたをよむ
百七段	藤原のとしゆき業平朝臣の家に侍りける女にものいふ
百八段	女誰ともしられず
百九段	花よりも人こそあだにのうた是は古今集にて紀茂行のうた也
自百十段 至百十三段	女たれともしられず
百十四段	芹川行幸は行平鷹飼つかうまつる
百十五段	おきのゐてのうた古今集にて小野小町のうた也

百十六段	女誰ともしられず
百十七段	住吉行幸大神現形
自百十八段 至百廿二段	女誰ともしられず古今集なるよみ人しらずのうたなど也
百廿三段	深草の里に住ける女をあきかたにや思ひけむうたよめる
百廿四段	おもふこといはでぞたゞにといへる述懐
百廿五段	つひにゆく道とはのうた

右の二つの表を對照すれば、天福本、従つて一般に朱雀院本系統の諸本の段序は、必ずしも作歌の年代順的配列のみによるものでない事が了解されるであらう。而してかかる配列方法は、伊勢物語が業平歌日記又は業平一代記の如き歴史の記述としてよりも、集成業平集として、戀愛贈答の模範的名歌集として、藝術的意識の下に編纂せられたるが故に採用されたのであつて、編者の各説話の連絡統一に對する態度は、外面的な編年の組織を退け、むしろ内面的に統一ある渾然たる一つの

抒情詩的雰圍氣を醸成せんと企圖するにあつたと推定されるのである。

第四項 結語

以上をもつて編纂態度に關する問題の考察を終ることとするが、これを要するに、勢語は一面集成業平集であり、贈答歌の模範集であると共に、他面に於ては興味深い慰み物語としての意圖の下に、業平集を以て基本とし、中心とし、更に萬葉集古今集、古歌集、私家集等種々の歌集に取材し、また説話の筋を傳説に借^りて、一篇の内容を豊富ならしめてゐるが、歌には修正を加へ、詞書は創作し、脚色し、すべてを同一の情調の上に置き、同一の雰圍氣の中に生かさうとする意識に於て編纂されてゐるといふことが出来る。

元來歌物語は、和歌の模範たるべき名歌集であると同時に、また興味多き慰み物語でもある。即ち歌物語は、實益と趣味との兩方面から導かれてゐる。従つてその内容は、憎み斥くべき事よりも、ほむべき事である場合が普通である。そしてほむべきこととは、主として花やかな優雅な戀愛や、又哀しく尊い出家の生活等であ

る。伊勢物語や、平中物語や、篁物語や、和泉式部物語等の如きは前者であり、多武峯少將物語や、遍昭集に於ける出家物語や、西行物語等は後者である。これ等の歌物語に於て「すきもの」とか「色ごのみ」とかは、決して排斥すべき意味をもつて取扱はれてゐない。源氏物語に於ける主人公の行動は、忌み嫌ふべきものとして取扱はれてゐるのでないのみか、むしろ理想的な男のはほるましい行動として是認されてゐる。伊勢物語にも數々の戀愛をうたつてゐるが、それ等は決して否定せらるべきものとして取扱はれてゐるのではなく、寧ろあらまほしき詩的な人生の一面として肯定せられてゐる。我々は歌物語に戀愛を主題とするものの多い理由を、和歌そのものの性質から、平安朝といふ特殊の時代に於ける戀愛そのものの性質から考へて見る時に、歌物語の本質の如何なるものであるかを了解することが出来るではないかと思ふ。

さて和歌が一轉して物語に向はうとする時、それは如何なる態度のもとに、又如何なる形式に於てまとめられるであらうか。歌物語の材料としての雑多な詞書の小断片と、和歌と、傳説とが、集大成せられるために、我々は二つの方法を認めるこ

とが出来た。その一は、ある私家集を中心として、その作者を全巻に互る主人公となし、その主人公の事蹟として、幾多の小説話群を適當に配列し、全體としてまとめた一の物語を構成する場合である。他の一は、何等中心となるべき私家集も作家も認めず、箇々の小説話それ自身を獨立したものと見て、集大成する方法である。前者に於ては、箇々の説話は、全體につながる主人公の事蹟の一の鎖として、全體の組織の上に極めて緊密な有機的關係を保つのであるが、後者に於ては、箇々の説話自身が、全體の組織と何等の關係なくして、斷片的に獨立し得るのである。前者は構成的であり、編者の藝術家としての手腕が重要なものとなるが、後者は雜纂的であつて、編者の藝術的手腕よりも、むしろ説話の集輯又は分類の雜多と變化とが、より一層重要なものとなる譯である。そして伊勢物語はその前者に屬するものである。大和物語はその後者に屬するものである。伊勢物語はその編者として藝術家を必要とするが、大和物語はむしろ博學な物識を必要とするであらう。

伊勢物語は業平集を中心として、箇々の歌と詞書と傳説とを集成し、昔ありける男の人格と風貌とを、その一つ一つのいづれにも宿らせ、生命づけることから、更に

部分部分について、又一篇の構想について、修正補訂を試み、全體としてまとめた抒情詩的な雰圍氣を醸し出すことに成功してゐる。我々が伊勢物語を單なる説話集と見ず、一つの藝術品として認めることに、何等の疑を抱くことの出来ない理由は、即ちここにあるのである。

第五節 成立年時

第一項 成立年時推定の方法

平安朝期の文學作品特に物語に於ては、作者の何人たるかはもとより、その成立年代さへ不明のものが甚だ多い。例へば、竹取物語・大和物語・宇津保物語・落窪物語・平中物語・狭衣物語等何れも然らざるはなく、伊勢物語も亦その例に漏れない。然るに作者と成立とに關する問題は、單に文學史の重要な研究題目たるのみならず、その解決は古典文學研究の全分野に互つて少からざる影響を與へる。今伊勢物語の成立年時と作者とを考證するに先立ち、一般古典文學の成立年代を推定するに如何なる方法が存在し、且可能であるかについて考へて見たいと思ふ。

成立年代を考證するにあつては、その立論の根據を作品の外部に在るものに

求めるか、或は作品それ自體の中に存するものに求めるかによつて、所謂微證なるものを外部的と内部的との二種に分つことが出来る。

外部微證は普通傍證とも稱せられ、主として該作品に近き時代に成立せる日記・記録・文書の類、又は他の文學的述作の中に證據を發見するものである。これによつて成立年代を推定する方法は、作品と傍證たるべき資料との時代の接近するに従つて、益々有力なものとする事が出来る。例へば和田英松博士が權記の「長保元年十二月十四日癸亥、詣東院奉返先日所借給拾遺抄歸宅」なる記事に基いて、拾遺抄の成立を長徳三年七月より長保元年十二月までの約二年半の間に限定され、金原亮一氏が蜻蛉日記天祿三年八月の條に「朔日の雨降り降らず時雨だちたるに、未の時ばかりに晴れて、つくづくばうしいとかしがましきまで啼くを聞くにも、我だにもものはといはる。」の「我だにもものは」の句が宇津保物語藤原君卷の「かしがまし草葉にかかる蟲のねよ我だにもものはいほでこそ思へ」なる歌によるものであらうといふ推定を根據に、宇津保物語の成立を天祿三年以前と規定された如き、又公任卿集の詞書に「るゆう院の御ときにやうつばのすゞし仲忠といづれまされるとろじ

けるに、しのはらすゝしが方にや有けむ、女一宮はなかたゞが方におはしけるにや、いづれをいるゝなどあるに、ものないひそとおほせられければ、ともかくもいはでおはしけるを、いひにおこせ給ふければ」とあるを、證據として、宇津保の成立を圓融院の御代、又はそれ以前と推測する等その例として擧げることが出来る。

内部徴證は作品それ自體の中に成立を推定すべき端緒を採求するもので、細別すれば、作品の外面的形態的の證據即ち傳本の成立の考證、文法的形態よりの考證等に基礎を置いて年代を推定する方法と、内面的内容的の證據即ち出典との關係、故實との關係、史實との關係等の考證より年代を限定する方法とを考へることが出来る。第一の傳本の成立を基礎として推論を進める方法に於ては、諸本の裝潢、紙質、書體、奥書その他外形的にこれを決定すべき徴證を掴み、その結果から原本の成立年代を推定するのであるが、これは由緒正しき古寫の傳本の存せざる場合には、當然不可能なる方法と言はざるを得ない。第二の文法上、形態上に立脚して著作年代を考證する態度は、例へば折口信夫博士が宇津保物語を鎌倉時代まで引下げようと試みられたる如き、或は藤岡作太郎博士が接續詞濫用の風の激減せし

と、且爾波助動詞等の驅使の自由、並にその意義の差別の精密となり來れること、平安時代中期以後に見難き古き言語の少なからず存在すること等を證據として、竹取物語の成立を貞觀より延喜まで三四十年間と推定されたる如きがそれである。第三の出典との關係を究明することによつて成立年時を推定する方法は、物語に於ては主として引歌、説話の引用、歌集に於ては年月の明かなる歌の存在を證據に選ぶ場合が多い。例へば、和田博士が拾遺集の詞書の中に寛弘元年九月以後にかかるものの處々に存する點より、二例を擧げるならば、雜春の左大臣道長の歌の詞書に「右衛門督公任こもり侍りけるころ、四月一日にいひつかはしける」とあるが、公任の閉居して出仕せざりしは、公卿補任によれば、寛弘元年九月以後の事といふ。その成立を寛弘二年六月以後に限定された如きその例である。第四の、故實との關係より年代を考證する方法の實例としては、手塚昇氏の説がある。氏は源氏物語落標の卷、明石中宮の生れた所に「御はかしさるべきものなど、所せきまで思しやらぬくまなし」とある御はかしの件と、長和二年七月六日三條帝の皇女禎子内親王の誕生の時が、皇女に對して御はかしを賜つた最初の例なることを關係づけて、

源氏物語の完成を長和二年以後と考證して居られるのである。第五は史實との關係より推定する方法であるが、これは必ず作品が史實を全然無視したものでないことを前提とする場合に限られる。而して史實と稱しても、更に傳記との關係、人名との關係、官職との關係、事件との關係等と細分することが出来る。若し著者が明かな場合に於ては、その傳記より作品の成立年時が推定されることがある。例へば源氏物語夕顔の卷に見える歌「見し人のけぶりを雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな」と紫式部集の「世のはかなきことをなげくころ、陸奥の名ある所々書いたるをみて、しほがまの浦」と詞書せる「見し人のけぶりとなりし夕より名もむつまじき鹽竈のうらの歌とを、式部の傳記に關係せしめて、源氏物語の成立年時を式部の寡居時代と推定する如きそれである。

次に物語中の人名と實在の人物との關係より著作年代を推定する方法の例としては、春山頼母井上頼文兩氏が、弘仁十四年四月、御諱にふれて大伴氏を改めてた大伴と稱へしめられた事と、竹取物語に於て大伴と稱することとの關係から、竹取の成立年代を弘仁三年より同十四年までの間と推定せるが如き（竹取物語新釋）或

は、坂井衡平氏が宇津保物語の成立年代推定の内部徵證として列擧された十一條の中に、「俊蔭と云ふ實在の人物は藤原姓で弘仁頃の人である。又其頃清原姓で有名な人には夏野岑成秋雄等があつた」「嵯峨院の子に一世源氏涼などの見えるのは、史實では同院の子の源弘や源融の事と近い。弘や融は貞觀から寛平の間に歿した」「朱雀院の名は最後の卷に見える等の存するが如き（國文學通史）も擧げることが出来る。次に作品中に官職の記載せられてゐるものと、補任制度等との比較から、該作品の成立年代を推定する方法も、殊に歌集の如きに於ては重要なものと言ふことが出来る。例へば和田博士が拾遺抄に見えたる作者の官位の中、藤原高遠を左兵衛督（長徳二年九月任せらる）藤原公任を右衛門督（長徳二年九月任せられ、同三年十月左衛門督に轉ず）藤原道綱を右大將（長徳二年十二月任せられ、長保三年七月十三日辭せり）とも春宮大夫（長徳三年七月之を兼ね、長保三年七月辭せり）とも記載せる點より、その成立時期を長徳三年以後と推定され、又拾遺集の作者の官名に藤原行成を左大辨（寛弘二年六月任せられ、同六年三月權中納言に進む）と記せることより、集の成立年代を寛弘二年六月以後と考定されたるが如き（皇室御撰之研

究或は故藤岡博士が大和物語に小野宮實頼を今の左大臣といひ、藤原師尹を今の左兵衛督とし、藤原清蔭を故大納言と稱する點と、師尹の左兵衛督たりし間が天慶十年より天曆七年までの間であり、清蔭の歿年が天曆四年なることを論據として、大和物語の成立はよしその全部たらずとも、少くともその一部は天曆四年より同七年の間なるべしと推定せられ、國文學全史平安朝篇春山井上兩氏は、竹取物語中に弘仁元年始めて置かれた藏人所の頭中將、同三年に定められた六衛のつかさ等の名の見える所から、同書の成立時期を弘仁二年以後同十四年までの間と推測されたるが如き、何れもそれである。但しこの場合には、官名が後人の手によつて修正されてゐるかゝるないかが、充分に検討されなくてはならない。次に歴史上の事件との關係より作品の年代が考證される場合もあり得る。例へば宮田和一郎氏が宇津保物語藤原君の卷の「例の宰相志賀に詣で給ひて」を始め、嵯峨院の卷、菊宴の卷に志賀寺に參籠せる記事の存することを指摘し、一方日本紀略扶桑略記西宮記裏書百練抄等によつて、志賀寺即ち崇福寺が康保二年三月焼失し、七月十四日造崇福寺使を補したること、天延四年六月十八日大地震により崩壞顛覆したること、寛和二

年十月三日に圓融院が崇福寺に御幸遊ばされたこと等を調査し、その結果天祿・天延の頃再建され、更に天元・永觀の頃に三度建立されたに相違ないと考證し、藤原君以下の成立は圓融院の天祿・天延中か下つても永觀以後ではないと主張された方法や、岩波講座日本文學宇津保物語手塚昇氏が源氏物語落標の卷に見える朱雀帝の眼病と御讓位とを大鏡に記する所の三條帝の眼病の爲の御讓位といふ史實に據るものと考へて、源氏物語の完成を三條帝御讓位の長和五年正月二十九日以後と推定された方法の如き、何れもその例である。

以上古典文學作品の成立年代は如何にして考證されるかといふ問題を取扱つて見たのであるが、これ等の種々の方法は必ずしもそれぞれ單獨にのみ適用されるとは限らず、多くの場合幾つもの方法を併用して考證されるやうである。而して如何なる方法が選擇されるべきであるかは、作品の様式なり傳來の事情なりによつて決定されるものと考へられる。

第二項 伊勢物語成立年時に關する從來の研究

前項に於ては、一般古典文學に於て成立の年次不明なる場合、これを推定するに如何なる方法が存在し、それ等の方法は如何なる條件の下に於て可能であるかを吟味して來たのであるが、本項では歌物語といふ特殊な文學形式を具へ、特殊な條件の下に成立し、特殊な傳來事情を有する伊勢物語の成立年代が、從來如何なる方法によつて考證されて來たか、又前記の一般的方法論が、如何にこの特殊な場合に適用し得られるかの二點を中心として、考察を進めて行きたいと思ふ。

伊勢物語研究史の上に於て、勢語の成立年代に關する考證の跡を眺める時、そこに截然たる二の對立せる意見を見出すことが出来る。その一は勢語を以て古今集に先行するものとなす説であり、その二は後撰集以後の成立に係ると考へる見方である。尙この外に古今集以後、大體に於て後撰前後と見る説も附加して置く必要がある。

一、延喜以前とするもの。

勢語の成立時期を古今集以前と認める説は、遠く平安朝に其源を發し、清輔の袋草紙を始め、顯昭古今集註、定家の流布本奥書、上覺の和歌色葉集、和歌知顯集、更に下

つては一條兼良の愚見抄以下の諸抄多くはこれを遵奉して來てゐる。然しその論據とする所は、作者を業平又は伊勢と稱する傳説以外に何物も存しない。例へば、無名草子の如きもこの説をとりながら、なほかつ勢語が古今集以前に成立したと推定し得る何等の論據をも示してゐないのである。即ち、

伊勢物語など申すはたゞ業平が好き心の程見せむ料にしたるものにこそ侍れ。誰かは世にあるばかりの人の高き下れるも少し物覺ゆる程の人、伊勢大和など見覺えぬやは侍る。されば細かに申すに及ばず。隅田川のほとりにて都鳥に言問ひ、八橋のわたりにてなれにしつまを戀ひたるなど、都のほかまであくがるらむも、たゞかの到らぬ隈なきしわざにこそ侍るめれ。大和物語と申すも、たゞ斯様の同じ筋の事なれば、とゞめ侍りなむ。誰も御覽じ覺えたる事なれば、その内の歌のよしあしなどは、古今集などを御覽せよ。これによきと思しき歌は入り侍るべし。

と見えてゐるが、この推定に對して幾分かの理論的根據を與へたのは藤岡博士である。博士の國文學全史平安朝篇に示された結論は、

イ、後撰集以後の成立と見る説の論據薄弱なること。

ロ、文法形態上土佐日記より古しと認められること。

の二點より導かれてゐる。即ち、

新説を唱ふる人が殊に主張し、また舊説の人も既にその實あるを知りて、これを疑へるは、業平歿後のことの巻中にあり、また生前のこともありといふにあり。まづ生前のことといふは、篇中第二節に「奈良の京ははなれ、この京は人の家まだ定まらざりける時」とあるをいふ。されど業平が書きたりとして、まじめなる日記にもあらず、わが事、他の事を擇ばず、萬葉集の歌をさへわがもの如く見せたりとすれば、奠都以後久しからぬ折などと、時を偽りて記せりとも、これを以ていかんぞまじめにそのいはゆる久しからぬ折の筆なりと妄信すべけんや。次に業平歿後のこととは、芹川行幸の記事、そのほか三四の和歌をいへるなり。されど眞淵の如き古今集にさへ後世の摺入ありといひながら、伊勢物語には、これは二條の後の云々などある註釋の記事をのみ、後人の裏書の混入せるものと辯じて、首尾全き一節にも摺入ありといはざるはいかにぞや。

蓋し春満・眞淵等はこの物語の戀愛の記事多きを厭ひ、またその和歌の純然たる平安朝の風體なるを喜ばず、萬葉調に私淑するあまりに、これに異なる作品の時代を實際より遅く考へて、さてこそ後撰に次ぐべきものなりとの先入的結論を得、芹川行幸の記事等を以てその論を装ひたるものなれ。されど眞淵は創作の才こそ許すべけれ、評論の法は奇抜なれど細緻嚴正ならずして、おのづから獨斷偏癖に流れ、遂に高足宜長の公平綿密なるに及ぶことも能はず。余は芹川行幸の記事等を以て伊勢物語の時代を斷定すべき條件とするに躊躇して、この書は後人の摺入少からざるものなることを揚言せんと欲す。そのいづれか原文にして、いづれか摺入せるものなると問はるれば、いまだ一々明確にその眞偽を指點しがたしといへども、今も引かれたる芹川行幸の一節、第百十五段「私云、天福本に於ては第百十四段の如きは、斷じて後人の摺入とせん、そは記載の事實によりていふにあらず、その文體を見よ、はじめに「昔、仁和の帝芹川に行幸したまひける時、なま翁の今はさること似げなく思ひけれど、もつぎにけることなれば、云々と長くいひ續けたるは、他の文と全く體を異にし、

結末に「若からぬ人は聞きおひけりとや」といへる「とや」の如きも、かの裏書の混入せるものがありがちの語なるにあらずや。されば現存せる伊勢物語は、後人の攙入せるところあるものなるは許すべし、しかもその原本をも併せて、後撰集以後のものとするは、玉石を併せて棄て去るに齊しからずや。

と云ひ、

そも、二書(伊勢竹取)の文はこれを修飾すべき形容詞副詞も多からず、接續詞も少く、奈良朝までに多く用ひたる「こゝに」「こゝを」をもて「故」又などは稀になりゆきて、「さて」などの簡單なるものあるのみ。且爾波はもとより奈良朝よりも數多く、使用も自在になりたれど、なほ延喜以後の如く饒多ならず、文脈に理路に關するものはもとよりこれあれども、文勢の弛張に關するは甚だ少し。「なん最も多く、ぞも」こそあれど、土佐日記の多きに比すべくもあらず。過去の助動詞の「きし」「しか」は伊勢物語に用ひず、古今集の和歌の端書も然り、竹取物語は草紙地には「けり」「ける」「けれ」を用ひ、對話には「き」を用ふ。

と論じ、

議論はしばらく措きて、更に伊勢物語を一讀すれば、その文のいかに簡潔にして質素なるよ。平安朝の文體は貫之の頃より、漸く修飾多く、纖麗にして絢爛ならんことをのみ務めたるが、竹取物語と伊勢物語とはこの弊なく、却つて簡素を主とすれば、土佐日記より古かるべし。而して簡素なる點においては、伊勢のかた竹取よりもまさりたれど、その書の種類の異なるより、文章もおのづから異ならざるべからざれば、強ち伊勢を竹取より古しとも定めがたく、概するに二者ともに延喜以前のものなるべし。果してしからは、伊勢物語の作られたるは、大やうは業平の時代なり。

と斷定して居られるのである。

博士は右の如き結論に導く第一の根據として、春滿・眞淵等の見解を先入的結論に誤られた偏見として却け、芹川行幸の行幸の記事その他二三の歌が後世の攙入として説明し得るの故を以て、後撰以後の成立に係ると推定する説を完全に論破し去つたと思はれたかのやうである。然しながら、我々はそこに、單なる攙入説のみによつて説明することの出来ない事實が、博士の注意外に残されてゐることを

指摘しなければならぬ。萬葉集はともかく、古今集後撰集の讀人不知の歌が、多数伊勢物語に存する事實がそれである。博士はまた第二の根據として文法形態上の特質を擧げて居られるが、成立年代推定の理論的基礎の一を、文法の時代的特質の上に求めようとする方法は、伊勢物語に於て無論可能である。但しこの方法を採用する場合には、單に勢語それ自體の文法的研究の結果のみを以て、直ちに主觀的な論證の根據とするだけでは不充分で、そこには精確な事實の整理の上に立つ最も客觀的な文法史の用意されてゐる事が必要であり、若し止むを得ないならば、勢語の前後に於ける成立年代の明白な他の作品との綿密な文法上の比較研究が準備されることが必要である。而して文法史なるものは、各時代の代表的諸作品の嚴密な文法的研究の結果より歸納されたものでなければならぬ。文法形態上よりの年代推定の方法は、かかる精細な文法史の存在を前提として始めて成立し得るのである。この點より見て、立論の根據になほ確實なる平安朝文法史を認めることの出来ない博士の説には、にはかに首肯し得ないものがあるのは當然と言はねばならない。

次に新撰國文學通史に見える坂井衡平氏の説は、

古今集との前後は一つの問題で集の物語歌は皆歌序が長々と引かれてゐて較々修飾的に成つてゐる所は物語の様な物から採つたと認められる。今二者を較べると集の歌序の方が詳しく物語の方は省かれてゐる。詳しく言ふと其にも二様有つて伊勢歌を業平歌として引いたものは一體に永く讀人不知歌として引いたものは簡略である。又歌序の引用は「或人」此歌は「となん云ひ傳へたるとや」の様^に傳説的で物語は筆に随つて記した趣である。文格は併し一致してゐる。有名な「風吹けば」の詞など其好例で物語の雨風の夜を歌序には月夜と直してある。是等は如何しても伊勢を古今が採つたと見える。又一帯に補綴の部と思はれる所に藤氏の榮華を露骨に記してゐるのは寛平三年基經薨後の事らしく、強ひて言へば此補綴は寛平法皇が道眞を登庸して藤氏を抑へようとした政策の頃と思はれる。是亦古今以前に物語の出した一證左で、兎に角伊勢物語の現本の成立と古今集の撰輯との間には餘程近い關係が有つた様である。

とあつて、古今以前成立説に屬する。而してその論據は次の二點

イ、伊勢物語より古今集の詞書の方が修飾されてゐること。

ロ、補綴は道實が登庸された頃になされたと推測されること。

にあると解釋される。

右の集の歌序の方が詳しく物語の方は省かれてゐるといはれた氏の立論には、別にこれと言ふ根據が示されてゐない。この結論は主觀的であることを免れないであらう。我々がさきに原據論に於て詳細に比較考究した結論に従へば、氏の意見とは全然反對の結果を得た。従て我々はこのまま直ちに氏の推論に従ふことは出來ないのである。

二、承平康保間とするもの。

伊勢物語の成立を朱雀村上の間と推定するものとして高崎正秀氏の説があり、それは國語と國文學第六十九號に示されてゐる。即ち、

空也が念佛を唱へ、六波羅密寺を建てたのは、朱雀村上の朝であつた。源信僧都も亦其間に生れてゐる。現存伊勢物語も亦決して古今集に先行しない筈

である事、必ずや此間に出來たであらうといふこと、其らの問題が解決出來るのは、さう遠くはないといふ様な夢見る日が多くなつて來た。

氏の説は從來のそれと異つて民俗學の立場より考察されてゐるが、成立年時の推定に關するかぎりに於て、未だ何等精確な證據を示されたものと言ふことは出來ない。所謂「夢見る日」なるものは何等現實の問題として示されてゐない。

三、天曆以後とするもの。

勢語の成立時期を後撰集以後に置く説としては、先づ契沖の勢語臆斷を第一に擧げなければならぬ。而して契沖の推定の論據は、大體次の諸點に要約出來るであらう。即ち、

イ、勢語古今集共に家集自記より出たるか、又は勢語が古今集に取材せること。

「古今集に業平の歌を載たるに詞書のくはしき所、おほくは此物語に似たるは、共に家集自記などより出たる歟。さらすば、此物語は、古今集の詞書をうつして、いよ／＼委しくせる歟。」

ロ、二條後の追復后位の天慶六年なること。

「二條後の事齋宮の事古今集にはほのめかして名をあらはにはいはず。此物語にはたしかにかけり。二條後は延喜十年までおはしましたれば、あらはに云べき事にあらず。又二條後は寛平八年に后位を停られさせたまひ、天慶六年に本位に復したまへば、復し給はぬほどは二條后とはかくべからざる歟。古今集にも二條后とかけれど、彼も後の人のあらためかけるにやとおぼしきは枇杷殿は承平八年に至りて左大臣とはなり給へるを、誹諧にもろこしのよしの、山といふ作者に左大臣とかけり。これに准らへて知べし。もし后位に復し給はぬほど后とか、ば、勅命に違背するにあらずや。」

ハ、貫之直幹等の歌の存すること。

「又此物語に、貫之等の伊勢と同時の歌を載せ、直幹などの後の歌をも載せ。」

ニ、順の名の存すること。

「順は永観の比まで在世なれば、此物語天暦の比よりはるかに後に出来たる證也。此所のみならば、こればかりは後の人の書くはへたるにやともいふべき

を、かゝる事あまたなれば、たすくべからず。」

右の各論據を検するに、(イ)は大體認められる所であるが、(ロ)の二條後の件も古今集に後人の改訂を許せば、伊勢に於ても亦否定しがたく、(ハ)の貫之直幹等の歌の存在は摺入説を以てしても略説明されるであらう。(ニ)の順の名の見える事については、後人の註とする見解もあるから、確證とはなしたがたいものである。

次に荷田春満も又この説を持する一人で、その著伊勢物語童子間に左の如く述べて居る。

童子間、詠歌大概には、古今の次に、伊勢物語をのせられたるに、先生、今三代集の次に、伊勢物語をいへる説ありや。

答、定家卿は、此物語を業平、伊勢兩人の間の作と心得たまへるにや、古今の次のせたまへる歟。此物語は拾遺以後の作とみゆる也。もし拾遺よりふくるとも、後撰には先たつべからず。古來不勘の説には古今より已前の作とおもへり。是業平の自記歟か、又伊勢が作かとするが故也。物語全篇の歌もふかく考へざる誤なるべし。

春滿が勢語の成立を後撰集以後と主張する所以のものは、左の二點に要約することが出来るであらう。即ち、

イ、後撰集の歌の存すること。

ロ、拾遺集の歌の存すること。

童子問の中からこれを證明すべき二三の例を引抄すれば、惜しめどもこの歌に對して、

此歌なり平にあらず、題しらず、よみ人しらずと後撰に書たり。戀歌とは見るべからず。此物語後撰より後なることも、此歌後撰によりて作りたる物也。

又「染河を」の歌に對して、

これも拾遺集の歌を本にして、作物語にはなしたる也。拾遺にては、業平歌にて、雜の部に入て題不知とあるを、物語には歌に合せて詞を作れり。拾遺集より此物語は、後の作と見ゆる一證ともすべし。

又「近江なる」の歌に對して、

此物語は拾遺集をとりて物語にしたると見えたり。これらによれば、此物語

拾遺集より後の物と見ゆるなり。しかれども拾遺集を花山院御自撰といふ説あれば、此物語拾遺集より前なるべし。花山院御自撰といふも不愼事なれば、猶明證を得て決すべし。

等の論議が即ちそれである。

賀茂真淵の説は伊勢物語古意に見える。その總論「作れる時代は」の條に、

或説に、こは業平朝臣の一期の事を自ら書たり。よて初冠より終焉の歌に及びり。此みづからならぬ理りは、已にいひつ。さて誰ぞの人歎うひかうむりより身づから我事を書そめて、いまはの時にして書はつる人やはある。又顯昭が古今秘注にも、此ふみはこきん集より前なる物とおもひて書るは、自記など、思ひてなるべければ、云にもたらず。定家卿の詠歌大概抄には、古今集の次、後撰集の上にこれをおきたり。其間の物としての事歟。今思ふに後撰に次ぐべき也。いかにぞなれば、古今六帖に合せて見るときは、在原元方、紀友則、壬生忠岑等のをも取て此文の歌とし、それより後なる天曆の比の博士橋直幹の歌をすら入たり。これらよりも彼陽成上皇は天曆のはしめまでおはし

まさんにお母后の密ごとをあらはならでも文に作り出ん事有べからず。はたその外にも其後なるべくおぼゆるが多し。下の條々に云を待べし。猶順朝臣の名さへ見ゆれど、こは後人の裏書なれば論なし。

と言つてゐるが、この真淵の推論の主なる根據は、

イ、在原元方紀友則壬生忠岑等の歌の存すること。

ロ、橋直幹の歌の存すること。

ハ、陽成上皇は天曆の初までおはせしこと。

右の三點に歸することが出来る。

真淵の論據(イ)は古今六帖に依存するところが多いが、古今六帖の歌の作者名並にその註記法に關しては可なり嚴密なる基礎的研究を経ざる以上、これを以て直に確實な資料と認めることは困難である。又既に藤岡博士も指摘されたやうに、(イ(ロ))は、共に摺入説を以てしてもなほ充分説明し得られるものである。

次に鎌田正憲氏は、やはり現存の伊勢物語を天曆以後の成立と認めてをられるやうである。考證伊勢物語詳解に、

流布伊勢物語を検し見よ。古今後撰によりて作爲せる條々少からず。これにつきては本文各その條にいへり。一例をあぐれば、後撰集春歌の條、三月盡の歌に、

をしめども春の限の今日も又夕ぐれにさへなりにけるかな

とあるを、伊勢物語にては、

昔、月日のゆくをさへ嘆く男、やよひのつごもりに、

をしめども春の限りの今日の日の夕暮にさへなりにけるかな

とし、戀に悶ゆる男の春のゆくをさへ嘆く心に作りかへたるが如き是なり。

この點につきては余は真淵が、

「今思ふに後撰に次ぐべき也。いかにぞなれば、古今六帖に合せて見る時は、

在原元方紀友則壬生忠岑等のをも取りて此文の歌とし、それより後なる天

曆の博士橋直幹の歌をすら入れたり。」古意總論作れる時代はの條

といひ、又、

「此書は同じ御代(村上天皇)の初めの人の歌も見ゆれば、この御代より前にも

あらず。はた冷泉圓融の御時より後なる體にもあらず。古意總論古本今本又作者はの條

といひて、この物語の編纂を天曆以後とするに左袒する者にして、天曆以後狩使本(原撰伊勢物語)の粉飾せられしを知るべし。

要するに鎌田氏の所説の基礎は、流布伊勢物語に古今後撰等の影響を認め得る點にあるらしい。而して伊勢物語の最初の形態はしばらく之を措き、その形態を現存本の如きものにのみ限定するならば、かかる見解は誤つてはゐないであらう。次に日本文學講座所載伊勢物語研究に見える窪田空穂氏の説も、亦勢語の成立時期を後撰集以後と推定するものの一である。即ち氏の結論は、

伊勢物語の出來たのは、村上天皇以後、一條天皇以前の、村上冷泉圓融・花山・一條天皇の五期、年として約五十年のあひだに出來たものと思はれる。

と言ふのである。而してかかる結論の下される根據として、四つの條項が擧げられてゐるが、今それを要約すれば大體次の如くなるやうである。

イ、第三十八段の「至は順が祖父なり。皇子の本意なし」の一句を伊勢物語新釋

は後人の書入として削つてゐるが、勢語臆斷の解釋の如く原形と見るべきである。従つてこの一句の存在は、この物語が順の在世時代、順が興味を持たれてゐた時代の作物であることを物語るものである。

ロ、第四十段に存する「武藏野の心なるべし」との註は、「紫の色濃き時は」の歌が古今集の「紫の一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る」を本歌としたとの注意である。作者としてそれを注意してゐるといふことは、古今集とこの物語の出來た時との間にかかりの距離があつた爲と解釋される。

ハ、萬葉集の歌を取入れる際の扱ひ方を見るに餘程萬葉集に習熟してゐた様である。従つてその時は村上天皇の天曆年間より必ず或時期を置いた時でないければならない。

ニ、源氏物語にも在る五が物語といひ、伊勢物語と呼ぶが、かく題號の一定しないことは、その書物が著はされて間がない頃のためでなかつたか。

右の各々の論據の當否について考へて見る。勢語の異本研究の結果よりすれば、論據(イ)の前提が必ずしも承認されないことを先づ明確にして置かなければな

らない。「至は順が祖父なり。皇子の本意なし」は神宮文庫本・真名本になく、最福寺本・大島本は「皇子の」以下を有しない。且朱雀院塗籠本に至つては、此一段をさへ缺いてゐるのである。若し定家本を以て伊勢物語の原型と認め得るならば、いざ知らず、然らざる限りこの一句が後人の書入でないことと断定することは早計としなければならぬ。従つてかかる異論の成立し得るものを前提とした論據が、確實性に乏しいことは云ふまでもあるまい。次の(ロ)は現存本の成立に關する限りに於て、より嚴密な意味を以てすれば、「武藏野の心なるべし」といふ一句の成立に關する限りに於て、正しいとされるであらう。然しこの註の存在を勢語の成立年代推定の論據とするためには、これが後人の附加したものでなく、作者の所記に相違ないことを論證しなければならぬ。この論證が出来ない今日、現存諸本の何れもが、此の一句を有するといふ理由を以て、直ちに後人の註でないことと決定することは不可能である。今まで示された理由を以て、作者の所記と臆測することが許されるならば、それと同じもしくは進んだ程度の理由を以て、反對に後人の註するところと見る推測も亦可能であらう。要するにこの論據は一の假定にすぎず、しかもその

假定たるや極めて確實性の乏しいものであることを注意しなければならない。論據(ハ)は一應人を首肯せしむるかのやうに見受けられるが、なほ再考するに同意出来ないものがある。萬葉集が平安朝初期に於て、一般に讀み難いものとなつてゐたことは事實であらう。然し源氏物語梅が枝卷にいふ嵯峨天皇宸筆の四卷抄、袋草紙和歌現在書目録等に傳ふる紀貫之の五卷抄、源氏物語河海抄に引く醍醐天皇宸筆本の存在したことを考慮の中に入れるならば、無訓本であつたにしても、上流社會に於ては可なり廣く讀まれてゐたと想像される。更にかの伊勢集に存する萬葉集の歌五首は、後人の増補に係るものと認めるとしても、菅家萬葉集の成立したといふ事實は、萬葉集に對する社會の知識と關心とが相當に廣まつてゐたことを示すものではなからうか。従つて、天曆年間に源順等五人が勅を奉じてはじめて萬葉集に訓點を下したといふことは、必ずしも天曆以前に萬葉集研究の事のなかつた證據とすることは出来ない。古點を萬葉研究の出發點と考へるよりも、むしろ一の研究の成果と解釋されないのであらうか。若し古點なるものを、天曆以前の種々なる訓法に對する研究業績の綜合統一として解釋するならば、習熟云

々といふことも已に勢語の材料を萬葉集に求める程度である限り、必ずしも天曆を相當下つた時期に待たねばならぬ必要を認めない。次に第四の證據としての(ニ)も直ちに承服することの出来ないかの問題は、該作品の成立年時といふことと、何等の必然的關係をも有しないからである。題號はむしろ諸本傳來の事情に依存する點が多いと思はれる。従つて(ニ)も理論的には確實な根據と稱し難いものである。

以上伊勢物語の成立年時推定に關する從來の諸説の主要なるものを擧げ、その理論的根據を一一検討し、批判して來たのであるが、更に此等の證據が成立年代推定の方法論として如何なる位置を占めるかを、全體として見渡して見ようと思ふ。よつて簡単にそれ等を表示すると次のやうになり、その大部分が内部徵證に屬することが著しい事實として注意される。

(一)外部徵證

源氏物語に於て在五が物語とも伊勢物語とも名稱が一定しないのは成立間もないためなること(窪田空穂氏)

(二)内部徵證

一、外面的形態的の證據

イ、傳本の成立よりの考證

ロ、文法的形態よりの考證

文法形態上土佐日記より古しと認められること(藤岡博士)

二、内面的内容的の證據

イ、出典との關係

勢語古今集共に家集日記より出たるか、又は勢語が古今集に取材せること(契沖)

貫之直幹等の歌の存すること(同)

後撰集の歌の存すること(春滿)

拾遺集の歌の存すること(同)

在原元方・紀友則・壬生忠岑等の歌の存すること(眞淵)

橘直幹の歌の存すること(同)

流布本伊勢物語に古今後撰の影響の認められること(鎌田正憲氏)

「武藏野の心なるべし」との註の存在は、古今集の成立と伊勢物語の成立との間に、かなりの距離のあることを示すこと(窪田空穂氏)

萬葉集の歌を拾録したのは天曆以後なるべきこと(同)

ロ、故實との關係

ハ、史實との關係

二條後の追復后位の天慶六年なること(契沖)

陽成上皇は天曆の初めまでおはせしこと(真淵)

補綴は道實が登庸された頃になされたと推測されること(坂井衡平氏)

「至は順が祖父なり。皇子の本意なし」なる一句の存在は、順の在世時代の作物なることを證すること(窪田空穂氏)

右の表示に依つて、伊勢物語の成立年時の考證に於ては、外部徵證と内部徵證との中、最も重要と考ふべき傳本の成立及び文法形態上の考證より推定する方法が、依然として未開拓のまま残されてゐることに氣付くのである。よつて項を改めて、

主としてこの問題に關して所見を述べて見たいと思ふ。

第三項 伊勢物語成立年時の考證

第一 傍證よりの推定

伊勢物語が物語として文獻に見えて來るのは、源氏物語「伊勢物語」に正三位をあらはせて「繪合」在五が物語かきて「總角」枕草子「あやしういせの物語や」等を最初とする。前項に於ても述べて置いたが、外部徵證の必須條件は、それが年代を推定せんとする作品と同時代か、又はその直後に成立した文獻の中に發見されねばならぬといふことである。若し年代の隔が大きければ大きい程、外部徵證即ち傍證としての價値は減少せざるを得ない。

傍證の價値が右の如き條件に支配されるならば、我々は勢語の著作年代を推定するためには、更に源語以前の作品に根據を求めなければならぬ。

土佐日記承平五年一月八日の項に、

これを見て、業平の君の山の端にげていれずもあらなんといふ歌なんおぼゆる。

二月九日の條に

故惟喬の親王のおほんともに、故在原の業平の中將の世の中に絶えて櫻の咲かざらば春の心はのどけからましといふ歌詠めるところなりけり。

とあり、又貫之が土佐在任中、政務の餘暇に選定せる新撰和歌集戀雜の部に、

しら玉かなにぞと人のとひしとき露と答へてきえなまし物を

の一首の存することを先づ指摘することが出来る。古今集に於ては「世の中に」の歌の詞書が單に「なぎさのゐむにてさくらをみてよめる」とあり、「しら玉か」の歌も存しないことは、右の二首が古今集より採録されたものでなく、業平集か、或は伊勢物語によつたものであることを示してゐる。然しこの原據が果して業平集であるのか、既に物語として改編された伊勢物語であるのかは、容易に決定し難い問題である。従つて伊勢物語の成立を承平四年以前と推定することも、亦困難と言はざるを得ない。

蜻蛉日記康保四年の條に、

三月晦方に雁子の見ゆるを、これ十づつ重ねるわざを、いかでせむと手まさぐりに生の絲を長う結びて、一つむすびては、ゆひ／＼して、引きたてたれば、いとよう重りたり。猶あるよりは、とて、一條殿の女御殿の御方に奉る。卯の花にぞつけたる。なに事もなかつた例の御文にて端に、この十重りたるは、かうても侍りぬべかりけりとのみ聞えたる。

數知らず思ふところにくらぶれば十かさぬるもものとやは見る

とあれば御かへり

思ふ事しらはかひやあらざらむかへすがへすも數をこそ見め

それより、五の宮になむ奉れ給ふと聞く。

とあるが、これは伊勢物語の

鳥のこをとをつゝとをはかさぬともおもはぬ人をおもふものかは(天福本第五十段)

を念頭に置いたものか、又は紀友則の

とりの子を十づゝ十はかさぬとも人の心をいかゝ頼まむ

によつたものか明かでない。従つて、この一事を以て伊勢物語の成立を康保四年以前と推定することは、勿論許されないことである。

又宇津保物語の

浅瀬こそふみも見るらめみなせ川ふかき淵にぞ我は沈める(忠こそ)

こうらんにおしかゝりて、眺めおはしまして思ふこと更にも言はず、おきの上
に居る心地して、彌益々に思さるゝに(嵯峨院)

富士のねは春日の春を餘所にみてかのこの雪も今やきゆらむ(梅の花笠)

名にしおはば關をもこえじ都鳥聲するかたを百敷にして(吹上)

あふことのなごしの祓しつるかなおほぬさならむ人を見じとて(祭の使)

兵部卿の宮より、敷かくとかいふ様なれど、思ふ給へやる方なければ、いかでか

思ひ給へ忘れむとて(菊の宴)

兵衛宿かす人はあらむをあいなき御事なりやなどなむ(初秋)

うらやましいま五月まつ橋やわがみに人はいつか待ち出む(國讓)

等が、それぞれ伊勢物語の

あさみこそゝてはひつらめ涙河身さへなかるるときかはたのまむ(天福本第百

七段)

をきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまへのわかれなりけり(第百十

五段)

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらにゆきのふるらん(第九段)

名にしおはゝいさ事とはむ宮こ鳥わかおもふ人はありやなしやと(第九段)

おほぬさのひくてあまたになりぬれは思へとえこそたのまさりけれ(第四十

七段)

ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり(第五十段)

ひとゝせにひとたひきます君まてはやとかす人もあらしとそ思(第八十二段)

さ月まつ花たちはなのかをかけはむかしの人のそてのかそする(第六十段)

によつて書かれたか否かは疑問であるとしても、

あかなくにまだきも月のなど宣ひて、かゝるすまひし給ふは誰ぞ。名のり給

へなど宜へど、いらへもせず立ちぬ。(俊蔭)

いと怪しき心侍りける身なれば、世の中に侍らずやなりなましと思ひ給へながら、言はではただにとか言ふなれば、嵯峨院)

あて宮からうじて言ひ出でたまふ。下紐とくるは朝顔にかといふことある。

(初秋)

こゝにてさへ覺東なきまゝに、昔を今にとのみなむ。(國讓上)

兵衛の君御籠の内にて、むかしを今にとこそ聞えさせ給ふべけれと言ふ聲いと近ければ、(國讓上)

等が、伊勢物語中の

あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなん(第八十

二段)

おもふこといはてそたゝにやみぬへき我とひとしき人しなけれは(第二百十

四段)

我ならてしたひもとくなあさかほのゆふかけまたぬ花にはありとも(第三十

七段)

いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしを今になすよしも哉(第三十二段)

の歌を引いたものであらうことは、も早や何等疑ふ餘地はないであらう。何故ならば、あかなくにの歌は古今集にも存するにしても、おもふこと我ならで」の二首は伊勢物語以外に所見なく、いにしへのの歌は古今集に於ては、いにしへのしづのをたまきいやしきもよきもさかりはありし物なり」とあり、昔を今に」とせるは伊勢物語のみであるからである。若し現存の宇津保物語を、枕草子に記載されてゐる所の平安朝期の作品と全然同じものと假定するならば、かつて宮田和一郎氏が考證されたやうに、又公任卿集に明記してあるやうに、おそくとも圓融院の御代には完成され一般に流行してゐたと認むべきである。よつて右の宇津保物語の引歌を論據とすれば、當然勢語の成立は、おそくとも安和以前と推定されなければならぬのである。

第二 諸本の成立よりの推定

勢語諸本の成立より直接的に原典の著作時期を推定せんとする方法は、諸本研究がきはめて幼稚であつたために、從來全く顧みられなかつたやうである。ただ鎌田正憲氏が勢語傳本中に二種の異本群を認め、その一を原撰伊勢物語即ち狩使本となし、その二を粉飾伊勢物語即ち初冠本となし、その形態上の差異に基いて、前者を古今集に先行するものとし、後者を天曆以後の粉飾に係るものとされた如き、その説の當否は別として、僅かにかかる方法の一例として擧げることが出来る。然し勢語諸本に關する研究の漸く進歩した今日、この方面に向つて、成立年代推定の論據を求めんとする企圖は決して不當の舉ではない。

平安朝期に於ける重要な勢語傳本として、信賴すべき文獻に見えるものは朱雀院塗籠本、三宮御本、皇太后宮越後本、小式部内侍本等の諸本であらう。

若し朱雀院塗籠本の奥に存する「此本者高二位本、朱雀院のぬりごめにをさまれりとぞ云々」の所記及び伊勢物語抄の「高二位成忠卿本 初起春日野若紫歌終迄昨

日今日云々 朱雀院塗籠本是也」とある記事にして信用されるならば、朱雀院の塗籠に存した本は、高階成忠の書寫本であつたか、又は所持本であつたか、そのいづれかの想像が許されなければならぬ。而して成忠の歿したのは長徳四年七十三歳であるから、これより彼の生年を逆算すれば延長四年となる。従つて高二位本は大約天慶以後長徳四年以前の間、に成立してゐると言はなければならぬ。

次に三宮御本について考へる。第一に問題となるのは、三宮とは何れの宮を指すかといふことであらう。平安朝末期より鎌倉初期にかけて三宮を稱せられたのは、先づ後三條院の皇子輔仁親王であり、次に高倉院の皇子惟明親王である。輔仁親王は中右記元永二年十一月廿四日の條に、

曉三宮(名輔仁)依勞給二禁出家云々(御年四十七)三宮後三條院第三皇子母女御源基子侍從宰相基平女也、年來有飲水病之上、近日二禁發背、遂以出家、才智甚高、能有文章、天之棄(良)人、誠惜哉

同廿八日の條に、

或人告云、三宮輔仁親王午時許薨給、年四十七、鹽小路烏丸亭(呼嗟哀哉、風月之遊

已滅天下了、母堂女御基子年七十一、于今現存也、哀泣之歎定難堪歟、生死無常以之可知

と見えて居るから、逆算すれば延久五年の御誕生となる。惟明親王は本朝皇胤紹運録に、

惟明親王大炊御門宮、號承安第三宮、建久六三廿九三品元服、承元五二出家、法名聖圓、承久三五三薨、四十三、母少將局、宮内大輔義範女

とある。按ずるに、古今集に於ては、貫之自筆とも貫之妹自筆とも稱せられた花園左府御本一名新院御本を傳へられた輔仁親王こそ、勢語の或證本を有するに適しき方であらう。而して三宮御本とは輔仁親王の書寫された本といふ意味であるか、或は三宮御所持の本の意味であるか、いづれとも明かでないが、なほ後者ではなからうかと察せられる。

次に皇太后宮越後本とは、皇太后宮越後書寫の本か、又は所持の本か不明であるが、その何れにしても、皇太后宮越後が果して何時頃の宮女であるかを調査しなければならぬ。平安朝中期より末期にかけて、越後と稱する女房を求めると、第一に

これに擬せられるべき人は、榮華物語楚王の夢の卷に、

又大宮の御方の紫式部が女の越後の辨、左衛門督の御子生みたるそれぞ仕うまつりける。

同じく殿上花見の卷に、

一の車には尼四人、辨尼辨命婦、左近命婦、少將尼君、二の車には侍従のすけゑらごの辨の乳母、大輔、平少將、むさし、三の車には江宰相美濃の小辨、兵衛内侍、御車の尻には宣旨、三位ぞ侍ひける。

と見えてゐる越後の辨であらう。公任卿集に、

宮にえちごととてさぶらひける女房に、ひとりのはいをやかせてとて、あづけ給たりけるを奉るとて、あかきかみにかきて、ひのやうにてうづみたりける。

數ならず埋もれたるがおもひにはあたりのはいも山と社なれかへし

うづもるゝけはいをみれば人しれず思ひやふじの煙ともたつ

とある越後も、恐らくこの越後の辨を指すものと思はれる。しかるに、皇太后宮越後に擬すべき女房は他にも見出される。それは金葉和歌集卷第八戀歌下に、

藏人家時かれん、になりけるを恨みていひ遣はしける。前中宮越後

人心あさ澤水のね芹こそかるばかりにもつま、ほしけれ

と載せられてゐる前中宮越後である。又同じく卷第一春歌に、

隣家藤花といへる事をよめる。内大臣家越後

芦がきのほかとはみれど藤のはな匂は我を隔てざりけり

同じく卷第三秋歌に、

内大臣家越後

天の河かへさの舟に浪かけてのり煩はばほどもふばかり

夜聞鹿聲といふ事をよめる。内大臣家越後

夜はになく聲に心ぞあくがる、我身は鹿の妻ならねども

同じく卷第四冬歌に、

内大臣家越後

理や交野の小野に鳴く雉子さこそばかりの人はつらけれ

同じく卷第九雜部上に、

内大臣家越後

月のあか、りける夜、人の琴ひくをき、てよめる。

又千載和歌集卷第十二戀歌二に、

ときん、物申しかはしける人に、名のたつはしらぬかと人のつげ、れば

よめる。

三のみこの家の越後

なれて後つらからましに較ぶれば無名は事の數ならぬ哉

右は皆内大臣家越後とある人である。但し千載集所記の三のみこは、輔仁親王の御事であり、金葉集所載の内大臣は、公卿補任によれば、輔仁親王の御子にして保安三年十二月十七日内大臣に任せられ、天承元年十二月廿二日右大臣に轉じた花園左府有仁であるから、三のみこの家の越後も内大臣家越後も共に同一人であらうが、これと前中宮越後とを同一視出来るかどうかは疑問とせざるを得ない。

然し越後の辨と内大臣家越後とは確かに別人であるに相違ない。それは第一

越後の辨の名の見えるのは、榮華物語でも楚王の夢殿上花見歌合等の卷々、年代より言へば、萬壽二年、長元四年、同八年の記事の中で、源有仁の内大臣在任の保安、天承との間に九十年以上の隔があること、第二前者は紫式部の女、後者は上覺の和歌色葉集上、名譽歌仙者の條に、「花園左大臣家越後 越後守秀綱女」と記されてゐることの二點によつて證明される。

次に越後の辨と前中宮越後との關係であるが、その前に一應越後の辨と大貳三位との問題を吟味したいと思ふ。越後の辨と大貳三位とが別人であるか、同一人であるかについては從來議論がある。別人とするものには、例へば國文學全史平安朝篇に於ける藤岡博士の説を擧げることが出来る。即ち博士の説に言ふ。

姉の大貳三位名は賢子、高階成章に嫁す、成章は正三位太宰大貳にして、その歌後拾遺集に入れり、世呼んで欲大貳といふ。賢子もその夫の職によりて大貳三位の稱ありしなり、後一條天皇の乳母なり。妹の辨の局また越後辨といふ。左衛門兼隆に嫁し、後冷泉天皇の乳母となりき。

次に同一人説を稱へるものには、國語と國文學第四十四號に示された石村貞吉

氏の説がある。氏の論據とされる所は、

一、榮華物語衣珠の卷に越後の辨の歌としてある「かなしさをかつは思ひも慰めよたれもつひにはとまるべき世か」の一首が千載集に大貳三位の名に於て出てゐること。

二、越後の辨は後冷泉天皇の御乳母であるが、新古今集によると大貳三位と後冷泉院とは、御乳母でもあるかの如き極めて親密な關係の見えること。

の二點であらう。この石村氏の推論を支持し、これに有力なる他の根據を與へたのは、石田吉貞氏が文學第一卷第五號に發表された中古歌人傳記者といふ論文である。石田氏の論據は、

一、後拾遺集に大貳三位の名で載つてゐる歌が、四首まで定賴卿集榮華物語祐子内親王家歌合に越後の辨の乳母典侍として出てゐること。

二、榮華物語松の下枝卷によれば、後冷泉院にも大貳三位といふ女房のあつたこと。

三、玉葉集に大貳三位とする一首が上東門院菊合に辨乳母とあること。

といふ三點にある。この兩氏の説は何れも確實な根據に立脚するものと認められ、越後の辨と大貳三位とは、榮華物語詳解卷首の系圖、後冷泉院乳母、越後辨、辨乳母、典侍、大貳三位の如く同一人であることが首肯される。今一つ石村氏の論據第二、石田氏の論據第二を、より一層確實ならしめるものとして、新しい資料を提供するならば、それは和歌色葉集の記載事實である。その名譽歌仙者の條に、

大貳三位 山城守藤宜孝女、母紫式部、後冷泉院御乳母、式部大貳成章爲妻、仍有此名、

と記されてゐて、大貳三位が後冷泉院の御乳母であつたことを明確に示してゐるのである。

かく越後の辨は、一名辨の乳母とも典侍とも稱せられ、後には専ら大貳三位の名を以て呼ばれて居る。もし前中宮越後が果して勅撰作者部類にいふ如く、堀川院中宮女房であることに間違ないならば、この兩人は當然別人と見做さなければならぬ。

以上考證の結果、越後の辨、前中宮越後、内大臣家越後は大體に於て各々別人と見

て差支ないかと思はれる。そこで次の問題は、これ等の三人と皇太后宮越後との關係である。皇太后宮越後とは、越後の辨のことであるか、又は前中宮越後を指すか、或は又内大臣家越後の謂であるか。この問題は容易に解決出来ない。何故ならば、皇太后とは例へば彰子(寛弘九年二月十四日—寛仁二年十月十六日)妍子(寛仁二年十月十六日—萬壽四年九月十四日)禎子(永承六年二月十三日—治曆四年四月十七日)章子(治曆四年四月十六日—延久元年七月三日)等何れの御方を指し奉るかの問題を先づ明かにし、次いで越後の辨、前中宮越後、内大臣家越後の中で、皇太后宮に奉仕したのは誰かといふことを検討しなくてはならないからである。而してこの二つの疑問を明かにする資料は、今までの所では先づ皆無と言ふことが出来る。従つてこの問題の闡明は將來に残されなければならぬ。若し皇太后宮越後が前記の三人以外の女房であるとすれば、その時は又別の問題を起すこととなるが、然らざる限に於ては、三様の想像が可能となる。即ち皇太后宮越後を紫式部の女越後の辨に擬するか、堀河院中宮篤子の女房前中宮越後に解するか、はた又花園左大臣有仁の家の越後に擬するか、の三つの場合である。而して假令最古の

越後の辨をあてるとしても、皇太后宮越後本の成立は、それが越後書寫の本ならば勿論のこと、假に傳來して所持した本としても、皇太后宮越後の本である以上、凡そ上東門院彰子の皇太后となられた寛弘九年を遡るものとは認められない。従つて現在の資料のみよりしては、皇太后宮越後本の成立、換言すれば皇太后宮越後の本としてその有に歸した時期を考證することに依つて、伊勢物語自體の成立年代を推定せんとする企圖は、先づ不可能事として放棄されねばならないであらう。

次には小式部内侍本に就いて考へて見る。岡田希雄氏の考證に従へば、小式部内侍が藤原公成の子を生んで死んだのは、萬壽二年十一月のことである。而して氏の推定の如く、寛仁二年頃の小式部の年齢を二十二・三歳とすれば、小式部内侍自筆本の成立は、大約長和萬壽の間と認めることが出來よう。袋草紙に清輔が泉式部本と稱するのも、實はこの本を指すのである。その名は小式部の死後、母の和泉式部が所持してゐたために附せられたのであらう。従つて、この本には親本が豫想されるにしても、その成立年代を考證するに足る資料は、現在の所見出し難いのである。

以上朱雀院本の系統と目される高二位本三宮御本皇太后宮越後本等の諸本と、これに對立する小式部内侍本との成立年時を考證して來た。その結果、勢語の成立年代を推定する上に必要な結論として、前者に於ては高二位本が最も早く天慶・長徳の間に已に成立してゐたこと、後者に於ては長和萬壽の間に成立してゐたことを知り得たのである。

次に立場をかへて、朱雀院本と小式部内侍本とは、いずれが早く成立したかを、その形態の上から考察して見る。今兩本の段序を比較するに、前者は初冠の段を冒頭に配し、終焉の段を最後に構へ、著しく組織的な序列様式を示すに對し、後者は狩の使の段を卷頭に置き、空ゆく月の段を卷末に据ゑ、きはめて雜纂的な編輯態度を示してゐる。單に段序のみから論ずるならば、雜纂的な配列を以て、組織的な配列に先行するものと見做さなければならぬであらう。然し小式部内侍本に存する章段として、傳爲氏筆本の卷末に附載された二十四段三十四首中、天福本に見えざる歌は二十一首あり、しかもそこに萬葉集の歌五首、古今集の歌九首を指摘し得られ、且それ等が何れも業平以外の人の作か、又は讀人不知の歌であることは、この